

## 吉井勇脚色、「地獄変」台本翻刻

### ——芥川龍之介「地獄変」の舞台化——

峯 村 至 津 子

京都女子大学図書館所蔵の貴重書に、「地獄変絵巻」という巻子本一軸がある（請求記号911.16／Y91 資料ID：196001519）。

芥川龍之介の王朝物、『古今著聞集』『宇治拾遺物語』などに取材した「地獄変」（『大阪毎日新聞』夕刊、大正七年五月一日～二十一日、『東京日日新聞』大正七年五月二日～二十二日、初出）を題材に、日本画家吉村忠夫（明治三十一～昭和二十七〔一八九八～一九五二〕年）が小説の内容を全八葉の絵に描き、吉井勇（明治十九～昭和三十五〔一八八六～一九六〇〕年）が登場人物や物語内容についての感慨や解釈を詠んだ和歌八首を付けたこの絵巻については、これまで稿者が本学発行の書籍類に資料紹介を執筆してきた。<sup>①</sup> 但しこれらは、絵巻の書誌的事項と内容とをごく簡潔に紹介するのみであつたため、現在、呆由美氏（本学国文学科・大学院国文学専攻非常勤講師）との共同研究で、原作である芥川龍之介の小説「地獄変」との比較、吉村と吉井との接点及び絵巻作成の経緯、推定される作成時期等について調査を行つており、その成果は別途公表予定である。<sup>②</sup> 今回はその前段階として、本絵巻に先行すると見られる一資料、京都府立京都学・歴彩館が所蔵する吉井勇資料「地獄変」（資料管理番号：文学004、文書番号：2190）を、翻刻し、一覧に供する。本資料は、吉井によつて舞台化された「地獄変」の台本である。

吉井勇が脚色した舞台「地獄変」は、昭和十年十月に築地東京劇場で上演された。『読賣新聞』昭和十年九月二十六日朝刊一面には東京劇場の十月興業前売り開始の広告が掲載されており、十月一日開場の一番目の演目として「地獄変二幕」「芥川龍之介原作 吉井勇脚色並演出 小村雪岱装置」とあり、「逝ける文壇巨匠の代表的逸品、問題となれる劇化こゝに完成して悽惨なる場面、名工の法悦等まさゝと舞台に躍動」といった煽り文句が付されている。歴彩館所蔵の資料は、起稿・脱稿などの年月日の記載はないが、この舞台化のための台本と見られ、四百字詰め原稿用紙六十七枚に万年筆で書かれた吉井勇の自筆資料である（括して京都府立総合資料館の住所・電話番号等が記載された茶封筒に収められた状態で保管されている）。舞台「地獄変」の台本については、『吉井勇全集』全八巻（昭和三十八～三十九年番町書房）、その復刻である『定本 吉井勇全集』全九巻（昭和五十二～五十四年番町書房）に収録されておらず、その全貌を知ることができなかつた。今回閲覧した資料は、削除や加筆等修正の跡が甚だしい紙も多く、これが初稿と見られるため、これを更に改稿したもののが存在した可能性も否定できない。しかし、台本には吉井自筆の鉛筆書きで割付の指示がなされている箇所もあり、この台本を印刷したものが出演者等舞台関係者一同に配布されたことも十分考えられる。『演芸画報』第二十九年十一号（昭和一〇・一一・一 演芸画報社）には、深井紫による舞台「地獄変」の概要が掲載されているが、それと本台本の内容が一致していることも、その証左となり得るであろう。この台本の存在によって、舞台地獄変の全貌が明らかになり、芥川の原作に吉井がどのような脚色を施しどこに力点を置こうとしたのかを窺うことができるようになる。簡単に紹介すると、横川の僧都と良秀とが鬭わすかなり長尺の地獄問答（ノンブル18～20ノ2）や、病床に臥す堀川の大殿の許に完成した地獄変の屏風を携えて伺候する良秀と、横川の僧都・大殿との三者会談及びその末に袂を分かつ最終場面（ノンブル59～65）など、原作に大きく脚色が施された場面が存在し、仏道の法力をも屈服させる芸の力がわかりやすくなる。芥川の原作に吉井がどのような脚色を施しどこに力点を置こうとしたのかを窺うことができるようになる。簡便に紹介すると、横川の僧都と良秀とが鬭わすかなり長尺の地獄問答（ノンブル18～20ノ2）や、病床に臥す堀川の大殿の許に完成した地獄変の屏風を携えて伺候する良秀と、横川の僧都・大殿との三者会談及びその末に袂を分かつ最終場面（ノンブル59～65）など、原作に大きく脚色が施された場面が存在し、仏道の法力をも屈服させる芸の力がわかりやすくなる。芥川の原作に吉井がどのような脚色を施しどこに力点を置こうとしたのかを窺うことができるようになる。簡便に紹介すると、横川の僧都と良秀とが鬭わすかなり長尺の地獄問答（ノンブル18～20ノ2）や、病床に臥す堀川の大殿の許に完成した地獄変の屏風を携えて伺候する良秀と、横川の僧都・大殿との三者会談及びその末に袂を分かつ最終場面（ノンブル59～65）など、原作に大きく脚色が施された場面が存在し、仏道の法力をも屈服させる芸の力がわかりやすくなる。

点からも、参照すべき資料の一つであると見られる。

『演芸画報』の同じ号には、雪岱による舞台装置が見て取れる写真や森茉莉の劇評、主人公の絵師良秀を演じた市川左団次、堀川の大殿を演じた澤村訥子らが執筆した記事なども掲載されており、こちらを含め、当時の新聞・演劇雑誌所載の劇評や「地獄変」舞台化に当たっての吉井勇自身の雜感等、舞台「地獄変」に関する資料については、吳氏との共同研究に於いて調査中であり、その詳細は別稿に譲りたい。芥川の原作、舞台「地獄変」、注(2)に記した「名作絵物語」、そして「地獄変絵巻」、これらの内容を比較することで、その成立の経緯もある程度明らかにすることができると思われる。それは、芥川の小説の享受の一端を窺うことにもなり、同時に、木村莊八の『たけくらべ絵巻』(大正十五・昭和二〔一九二六～一九二七〕年)など大正時代からしばしば行われていた近代の小説を絵巻に作るという文壇の潮流との関わりなどを検討する材料にもなり得るのではないかと考えられる。こうした研究の前段階として、今回舞台「地獄変」台本の翻刻を示すことに、基礎作業としての意義を認めることができるだろう。

### 【翻刻凡例】

- ・原資料はB4版四百字詰め原稿用紙、縦書き。万年筆で書かれている。
- ・用紙右上に算用数字でノンブルが付され、下線が引かれている。途中から、ノンブルと実際の枚数とに齟齬が生じて いるが、ノンブルは原資料に記載の通りとし、注記で、実際の枚数を【】内に補つて示した。
- ・稿者による注記は、「」に入れて示した。
- ・原稿には多くの加筆修正が施されている。読みやすさよりもその執筆の試行錯誤の跡を可能な限り見て取りやすく示すことに留意した。

- ・加筆は、前後の行間や、前後の行の文字の入っていない部分に書き込まれていることが多いが、原稿用紙の上下左右の欄外に複数行に亘る書き込みがなされている場合もある。加筆部分はおおよそ原稿と同じ位置に配置したが、改行や行の移りについては原稿そのままの形を反映できていない。付記すべき事項がある場合は「」内に注記した。
- ・行間に書き込みがある場合は、行を余分に設け、行間であることを「」内に注記した。
- ・行間及び欄外の書き込みは、文字を□で括り、原資料では吹き出しで指示されている挿入箇所と加筆部分の双方に「<sup>1</sup>」というようにアスタリスクと数字を付し、それらを照合することによって修正加筆の跡を把握できるようにした。\*の後の数字は、原稿用紙毎に新たに1から振り直すようにした。なお便宜上、一部アルファベット小文字を使用した所がある。
- ・句読点の加筆については、煩雑を避けるため、挿入の指示がある箇所に□で囲んで入れ込んだ。
- ・翻刻中の●は、一旦書かれた文字が塗りつぶされて判読できない箇所を意味する。
- ・削除された箇所の文字が判読できる場合は、消されている文字も翻刻し、その上に＝を付して見せ消ちとした。
- ・原稿用紙の空白のマスは、□で示した。
- ・原稿用紙のマス目を無視して、例えば二マスに一字、四マスに三字、などというように記されている箇所が随所にある。また、原資料ではト書きがパーセン（）で括られ示されているが、括弧に原稿用紙一マス分を使用せず、前後の文字と同じマスに記されている箇所が多い。句読点についても同様に、一マス分を使用せず、前の文字と同一のマスに入れられ、その後が一マス分空白になつている箇所がある。こうした内容に関わらない原稿用紙の使用法については、厳密に反映はできていない。翻刻のベースラインが捕つていない箇所があるのはそのためである。こうした箇所について、一々の注記は省略した。

1

- ・同じ漢字について、旧字体と現行の新字体に当たる文字が両様使われているなど、字体の不統一が見られる。また、全般濁点の有無にも不統一が見られるが、これらはすべて原稿のママとした。
  - ・平仮名の「か」についてのみ、「可」を崩した変体仮名が多く用いられている。当該箇所については、翻字の文字に傍線を付した。
  - ・原資料に鉛筆書きで書き込まれている割付指示はゴシック体で記し、その旨注記した。

堀川 の若殿。 横川 の僧都。 康清、老ひたる侍臣。 經光、若き侍臣。  
 狹霧、堀川殿の女房。 螢火、全。 貞菰、全。 近侍。 仕丁。 侍童。 僧。  
 「良秀」と呼ばれる猿。 その他。 上の巻 その一

〔ここまで一枚目。〕

〔ここまで二枚目。八行目以降は空白。〕

堀川の邸。 対屋につづく長廊下。 前に池。 向ふに遣戸。 明るい晝。 狹霧、 螢火の二人の女房は、 長廊下の上に立んでゐる。

（遣戸の方を見て）おお、 良秀がこつちに遁けてまゐります。 螢火。 ええ。 良秀と申しますと、 あの高慢な繪師のことです。 狹霧。 いえ、 今わたくしが良秀と申しましたのは、 この間丹波から献上した猿のことです。 申したのでござります。 螢火。 ああ、 さうさう、 憎まれものあの繪師に、 姿形がよう似てると云ふので、 猿に良秀と云ふ名前を、 誰やらが附けた

\*1 向ふ

〔行間書き込み。〕

〔（）ここまで三枚目。〕

□□と云ふことでござりますね。□□□□□

□□御覧なさいまし。跋引き引き遁げて来る  
狹霧。また何か悪戯をしたに違ひありません。

□□御覧なさいまし。跋引き引き遁げて来る  
□□様子は、あの繪師の横柄<sup>1</sup>な良秀そつくり

□□様子は、あの繪師の横柄<sup>一</sup>な良秀そつくり  
□□ではございませんか。□□

螢火。しかしこんなことは、現在娘の夕月ど  
□□ではございませんか。□□  
\* 1 憎惡の意を表す  
□□□□□

螢火。しかしこんなことは、現在娘の夕月ど  
□□のの前では申されませんね。□□□□□

□□のの前では申されませんね。□□□□□  
狹霧。  
\*<sup>2</sup> (驚いたやうに) あれ●、何時の間にやあ

\*2 憎體と云へばあの猿め、女だと蔑つて、平氣でそこへまゐりました。

の猿め、女だと蔑つて、平気でそこへまゐりました。  
螢火。●●●●●●○\*<sup>3</sup>さあ、往<sup>キ</sup>来<sup>ス</sup>\*<sup>4</sup>や。

螢火。  
●●●●●○  
\*3ええ、憎らしい。  
\*3えあ、往<sup>ま</sup>々<sup>ま</sup>や。  
\*4に  
○○□

狹霧。 \* 3 ええ、憎らしい。

●●。 \* 5

□□□ \* 5 (聲を合せて) しつ、しつ。

に \* 4

『**螢火**』  
遣戸の隙<sup>※6</sup>から遁げ出して來た猿は、

螢火。遣戸の隙6から遁げ出して來た猿は、  
\*7 今度は遣戸の隙から遁げ出し

人には追はれ  
●元来の方へ戻す  
□□□

□□□人に追はれ●荒来の方へ戻りてゆく。  
□□□狹霧と螢火とはそれを追ふやうにして

□□□□□ 狹霧と螢火とはそれを追ふやうにして  
□□□□□ 遣戸の向ふに入る。□□□□□

〔行間書き込み。〕

〔上欄外から中央柱魚尾の前後に書き込み。〕





〔<sup>1</sup>何と申しても〕

〔行間書き込み。〕

□□存じませんが、●●●●●<sup>1</sup>畜生のこと

□□ございます。どうか御勘弁遊ばして下さ

□□いまし。□□□□□□□□□□□□□□□□□□

〔<sup>2</sup>を〕若殿。（足を踏み鳴らし頭●<sup>2</sup>振つて）いや、いや、

□□勘弁致すことはならぬ。そちはまた何で

□□その猿をかばふのぢや。その丹波の山猿

□□は、柑子盜人の不届きものなのだぞ。□

夕月。<sup>3</sup>柑子盜人かは存じませんが、何分畜生□□□□<sup>3</sup>仰せの通り不届きな<sup>4</sup>ことでございま〔<sup>5</sup>つてか〕

〔行間書き込み。〕

〔<sup>4</sup>への挿入部分、一四・一五行目の行間／一六・七行目の行間にかけて、上欄外に書き込み。〕〔<sup>6</sup>現在〕〔<sup>7</sup>わたくし〕

〔行間書き込み。〕

\*<sup>4</sup>わけてお赦し\*<sup>4</sup>わけてお赦し  
を願ひたいの  
でござります。□□申しますので、□●●●●<sup>6</sup>娘の●<sup>7</sup>の身にな□□つて見ますと、父が御折檻を受けますや  
□□うで、如何も唯見ては居られませぬ。ど

□ うか命だけは、□ 助けてやつて下さいまし。

若殿。(點頭いて) さうか。父親の命乞ひと ● \*<sup>8</sup> あ

□ □ らば致し方がない。枉げて赦してとらす  
一字としよう。命冥加な山猿だな。はいはい。  
下ゲ

以下同じ「若殿はそのまま遣戸の向ふへ入る。 □

\*<sup>1</sup> つて \*<sup>2</sup> を \*<sup>3</sup> やうに

夕月。(猿に向 ● \*<sup>1</sup> 人にもの \*<sup>2</sup> 云ふ \*<sup>3</sup> ) 可哀さう  
□ □ に。畜生のことゆゑ分別もなく、欲しい

\*<sup>4</sup> 頭から

〔行間書き込み。〕

\*<sup>5</sup> 呼ばはりは、あんまり酷いなされ方。

〔\*<sup>5</sup>への挿入部分、五〇行目の下欄外に書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

□ □ と思つて奪つたものを、 \*<sup>4</sup> 柑子盜人 ● ● ●

□ □ の御折檻は、 \*<sup>4</sup> 辛かつた \*<sup>5</sup> あやう。

\*<sup>6</sup> ああやつて、

〔\*<sup>6</sup>への挿入部分、九〇二行目の上欄外へ行頭一マス分を使って書き込み。〕

□ □ しかしもう \*<sup>6</sup> お赦しが出たからには、いつ  
うに、曹司の疊を泥は \*<sup>7</sup> し、

□ □ のやうに遊んでゐたがいい。とは云へ  
\*<sup>7</sup> これからは

〔行間書き込み。〕

□ もう \*<sup>7</sup> 今のやうな悪あがき、 \*<sup>8</sup> お叱りを受け

\*<sup>b</sup> 足で穢

\*<sup>8</sup> それからまた  
\*<sup>a</sup> 何時  
\*<sup>a</sup> やのや  
\*<sup>a</sup> 曹司の疊  
\*<sup>b</sup> 泥は \*<sup>b</sup> し、

\*<sup>6</sup>康  
\*<sup>5</sup>惟清。ああ、夕月どの。相変らず猿めを大事  
\*<sup>7</sup>成

〔<sup>5</sup>五十六七歳位の老人だが、一目で純情な男だと云ふことが分る。〕

〔行間書き込み。〕

\*<sup>13</sup>  
これこの  
やうに

\*<sup>15</sup>まで  
あ

〔行間書き込み。〕

□□猿はその言葉を解するもののやうに、點  
□□頭きながら\*<sup>10</sup>往きか\*<sup>11</sup>ける。□□□□□□□□□□  
夕月。（気が付いたやうに呼び留めて）ああ、●●  
□□や、待ちや。今お姫様から頂戴した黄金こがね

\*<sup>12</sup>待ち

□□のやうな<sup>9</sup>りたずめを、再びしてはなりま  
□□せぬぞ。\*<sup>9</sup>悪戯□□□□□□□□□□  
□□猿はその言葉を解するもののやうに、點  
□□懸\*<sup>11</sup>  
□□聴いてゐたが、やがて梢々と

〔行間書き込み。〕

〔<sup>13</sup>への挿入部分、一七行目の上欄外に書き込み。〕

□□の鈴、\*<sup>13</sup>真紅の紐●\*<sup>15</sup>付いてあ\*<sup>16</sup>る。これをそ  
□□なたに\*<sup>14</sup>美しい進ぜませう。□□□□□□□□  
□□夕月は猿を引き寄せて、□取り出した紅紐

〔ここまで六【七】枚目。〕

\*<sup>2</sup>鈴の音を立て

〔右欄外書き込み。〕

□□てやる。猿\*<sup>1</sup>うれしさうに首を振り、□\*<sup>2</sup>ながら  
□□夕月の周りを飛び廻る。□\*<sup>3</sup>臣□\*<sup>4</sup>康□□□

□□遣戸の向ふより老ひたる●侍\*<sup>3</sup>惟\*<sup>4</sup>清出づ。

\*<sup>1</sup>は

〔行間書き込み。〕



\*22大

□□<sup>\*21</sup> \*22殿様の御前へ往たら、おとなしうして  
□□<sup>\*21</sup>を抱き上げてゐねばな<sup>リ</sup>ませぬぞ。□□

□□惟<sup>\*23</sup>清を先に、夕月は猿を抱いせ<sup>\*24</sup>遣戸の方

□□康<sup>\*23</sup> <sup>\*24</sup>たままで

〔左欄外書き込み。〕〔ここまで七【八】枚目。〕

二行アキ

堀川の邸の對屋<sup>たいや</sup>の一部。□□□□□□□

大殿<sup>●</sup>若殿、狹霧、螢火、眞菰の三人の

\*1侍童

〔行間書き込み。〕

〔上欄外から一・二行目の行間にかけて鉛筆書き指示。右一行目及び二～四行目行頭の括弧も鉛筆書き。〕

\*3 康清と猿を抱いた夕月とが出て来る。

惟<sup>\*4</sup>清。御沙汰の通り、猿ともども<sup>\*5</sup>夕月を併<sup>\*6</sup>れて

\*4 康まゐりました。□□□□□□<sup>\*5</sup>に□□<sup>\*6</sup>召し連

大殿。□近<sup>\*7</sup>おお<sup>●</sup>（夕月<sup>●</sup>）ようまゐつた。もつと

□近<sup>\*7</sup>おお<sup>●</sup>（夕月<sup>●</sup>）ようまゐつた。もつと

\*8 康まゐりました。□□□□□□<sup>\*9</sup>かへつて□□<sup>\*7</sup>への挿入部分、八行目～九行目間にかけて上欄外から行頭一マス使用し書き込み。

\*10 恐れ□□<sup>\*8</sup>への挿入部分、一〇行目上欄外から行頭三マス半ほど使用し書き込み。

\*9 畜生を伴つて居りますゆゑ、お傍近く●へは〔行末一字分、欄外。〕

\*8 御言葉添うはござりますが

\*14  
(不審さうに)

□□木ります。こちら邊でお目通り致したいと存じます。〔行末三字分、欄外。〕  
大殿。遠慮には及ばぬ。その畜生ゆゑに沙汰

\*11の話

\*12聴き及ん

〔行間書き込み。\*12の挿入部分、行末二字分欄外。〕

□□致したのぢや。今若殿から委細\*11を●●\*12

□●だが、さてさてそちは孝行なやう\*13ぢや。

□□褒めてとらすぞ。□□□□□□\*15

□□□□□□\*15

夕月。<sup>14</sup>何と仰しやいます。孝行とおゆ\*15しやい

□□ますと。\*16はまきまき。□□□□□□□□□□□□

□□□□□□

〔\*14への挿入部分、一七行目上欄外に書き込み。〕

大殿。(笑つて) \*16自分では何も気が付かぬのぢ

□□やな。そちはみなが良秀々々と、□そちの

□□父親の名をその猿に付けて、ひどい目に

□□會はせるのをいとしがつて、むじまは可

□□愛がつてゐるばかりか、今日は若殿が柑

\*1  
ぢやと云ふ

〔行間書き込み。〕

〔ここまで八【九】枚目。〕

□□子盜人\*1で、\*2折檻をした時に、命乞ま

□□としてやつた\*2責めと云ふことではない

□□か。それと云ふのも、すべて父親を思ふ

□□孝心から出たこと、感じ入つたればこそ

\* 4  
（いくらか愛情を  
（ママ）  
仄めすやうに）

夕月。これはまた思ひも懸けぬお褒めの言葉  
□□で、かへつて恐れ入ります。□□□□□  
大殿。\*眉目形ばかりでなく、そちは心も美し  
□□召し出したのぢや。□□□□□  
\*3 お□

\* 5

□□い女ぢや。（女房達に）申付けて置いた品、

\* 6  
とらせ

□□夕月に違はレたがい6い。

眞菰。夕月どの。大殿様から●御褒美の品は  
\*7

。すみません。お手数をおかけして

下され  
紅の絹を夕月の前に置く。  
まし

夕用。  
御  
真菰は  
褒美の品まで頂戴致し  
ては、

□□ふ心地放棄す。(袖白三甲  
12、二)

三  
はそれを

□□ 夕用\* 補をそこに置くと  
猿~~は~~夕用\* 取り上

\*13  
が

〔行間書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

〔左欄外書き込み。〕〔ここまで九二〇枚目。〕



大殿。おお、阿闍梨様が見えられたか。こち

\*14  
者

〔行間書き込み。〕

□□らにお通し申せ\*13。（一同に）みんなのもゆ\*14は

\*15  
よ

\*16  
ぞ

〔行間書き込み。〕

□□下がつたがゆ\*15い\*16。

\*13  
したがよい

□□□

\*18  
康清

三人の女房なども、みんな往つてしまつたので、

\*17  
女房は直ぐにまた元来たところへ入

〔行間書き込み。〕

\*18  
への挿入部分、一四行目行末四マス～六行目にかけて下欄外に書き込み。〕

近侍\*17る。若殿、

□□□夕月\*18  
19□□□□□□□□

\*20  
が

〔行間書き込み。〕

□□大殿\*20一人残●つてゐるだけである。

\*19  
そこには□□□

〔行間書き込み。〕

近侍\*21かれで横川の僧都\*22出●て来る。五十歳位

〔行間書き込み。〕

女房

\*21  
導

〔行間書き込み。〕

□□の瑞厳な□顔付をした高僧。近侍は直ぐに往つてしまふ。〔行末二字分下欄外に書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

大殿。おお、阿闍梨にはようこそ来られた。

□

□□さあ、\*23ずつとこ●らへ。□□□□□□□□

\*23  
端近でなく

〔左欄外に書き込み。〕〔二二〕まで一〇〔一二〕枚目。〕

僧都。それでは御免を蒙ります。□□□□□□

\*1  
僧都大殿は横川の僧都を上座に据ゑる。□□

〔<sup>2</sup>でした〕

〔行間書き込み。〕

太殿<sup>1</sup>。久しくお目に懸かりませ奉ん<sup>2</sup>が、□相

□□も変らぬ<sup>3</sup>權者の面影、大腹中の御器量を

□□挾し、悦ばしく存じます。□□□□□

大殿。御言葉にて痛み入ります。阿闍梨様に

□□もお変りなく何よりも珍重のことと存じ

□□ます。(思ひ出したやうに)承はれば先日は、□

\*<sup>3</sup>の中でも  
横川あたり

〔<sup>4</sup>殊に<sup>5</sup>夥しか〕

□□比叡の御山<sup>3</sup>に、夥<sup>4</sup>落雷があ<sup>5</sup>つたとの

〔<sup>6</sup>んでした〕

〔行間書き込み。〕

〔<sup>3</sup>への挿入部分、七・八行目の上欄外に書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

僧都。<sup>7</sup>少<sup>8</sup>や。横川あたり<sup>8</sup>落雷のあるは毎度の

□□(\*<sup>7</sup>笑つて<sup>9</sup>)こと、別に何ごとも<sup>10</sup>ざりませんでし

〔行末四字、下欄外に書き込み。〕

□□(\*<sup>9</sup>た<sup>9</sup>せぬ。それよりも殿には先立つて来朝の、

□□華陀<sup>11</sup>の術を傳へた震旦<sup>12</sup>の僧に、おん褪<sup>13</sup>の

□□瘡をお切らせになつたさうな。□□□□

大殿。(これも笑つて)試みに切つて貰ひましたが、

□□いさざかの痛みもなく、まことに名手と存  
□□ぜられました。これも法力の●●●<sup>10</sup>でござり

<sup>10</sup>ため

□□う●かな。□□□□□□□□□□□□□□□□  
僧都。(この言葉にきつとなつて)されば殿、震旦の

<sup>2</sup>に瘡をお切らせになつてさへ、直ぐに法力のためと思はるるほどに

〔ここまで一一【一二】枚目。〕

〔右欄外書き込み。〕〔右欄外に書き込み。〕

□□僧の法力まで、かく<sup>1</sup>深く<sup>2</sup>焦<sup>3</sup>せや<sup>4</sup>や<sup>5</sup>殿が、

<sup>3</sup>仔細  
わけ

〔行間書き込み。〕

□□如何なる譯<sup>3</sup>あつて良秀のやうな繪師に、

□□地獄変の屏風を描くやうにお吩咐になつ

□□たのでござりますか。□□□□□□□□□□

大殿。ヰ●●●ヰいや、それは。(云ひ懸けて口を噤<sup>5</sup>む)

僧都。良秀は高名な繪師には違ひありませぬ

(言葉をつづけて)が、強情我慢の横道者。いつも本朝第一

<sup>5</sup>ぢや  
\*5

〔行間書き込み。〕

<sup>4</sup>への挿入箇所(七行目上欄外)行頭二文字分使用し、書き込み。〕

□□の繪●師<sup>5</sup>と申すことを、鼻の先へぶら下  
□□げて居ります。それも画道の上<sup>6</sup>ならばま

□□だしものこと、世間の習慣とか<sup>ならば</sup>のみ<sup>\*6</sup>價例<sup>しきたり</sup>  
 □□とか申すことまで、すべて莫迦にせずに  
 □□は措かないでござります。わたくしの  
 □□行状●ぢやと申して、あらぬ戯画を描き  
 □□ましたのも、あのつむじ曲りの良秀で<sup>ざ</sup>  
 □□ざいました。□□□□□□□□□□□□□□□□  
 大殿。(遮るやうに)いや、良秀の評判の悪いこ  
 □□とは、今さら阿闍梨の口から聴くまでも

<sup>7</sup>居り

□□なく、わたくしもよう存じてあ<sup>7</sup>ます。□

<sup>8</sup>いませ

〔行間書き込み。〕

僧都。まだそればかりではござや<sup>8</sup>ぬ。良秀は  
 □□たしかに●<sup>9</sup>魔<sup>10</sup>の生れ変りでござるぞ。現

<sup>9</sup>天<sup>10</sup>外遁破句<sup>は</sup><sub>は</sub><sup>は</sup>

<sup>1</sup>悪

〔左欄外に書き込み。「破句」は原稿のママ。〕〔こまで一二一三枚目。〕

□□にいつぞや檜垣の巫女に御<sup>1</sup>靈が憑いて、

<sup>2</sup>怖ろ

□□●<sup>2</sup>しい御批宣があつた時も、あの男は空

〔行間書き込み。〕

〔右欄外に書き込み。〕



\*16 お

〔行間書き込み。〕

□□よう知つて●\*16 ぬでになるとは思はれませ

\*17 申し

□□ぬ。第一良秀の繪と●\*17 ますと、何時も

\*18 怪しい噂

□□必ず氣味の悪い、妙な評聞\*18ばかりが立つ

□□ではござ●ませぬか。たとへばあの男が

□□龍蓋寺の門へ描きました、五趣生死の繪

□□に致しましても、夜更けて門の下を通り

□□ますと、天人の嘆息をつく音や啜り泣き

□□をする聲が、□聽こえると申すことでござい

\*2 臭

〔行間書き込み。〕

〔ここまで一三【一四】枚目。〕

□□ました。いや、中には死人の●\*1\*2ひを嗅い

\*4 あつたので

\*5 す

〔行間書き込み。〕

□□だ\*3申すものさへ\*4ございま●\*5。

\*6 現に

\*1 腐つてゆく

〔行間書き込み。〕

□□そ\*3とれから\*6大殿様のお吩咐で描いた、

\*7 で

〔行間書き込み。〕

こちらの女房達の似せ繪なども、その描かれた人

<sup>8</sup>みな

〔行間書き込み。〕

□□達は三年と経たぬうちに、備<sup>8</sup>魂の抜けた

□□やうな病気になつて、死んだと申すで●

<sup>10</sup>〔語調を強めて〕

<sup>11</sup>が

〔行間書き込み。〕

□□ございませんか。 \*10 殿。 良秀<sup>11</sup>はなしかば

天

<sup>15</sup>その良秀に、

〔九「一〇行目行間、下欄外にかけて書き込み。〕

□□悪魔<sup>12</sup>の生れ変り<sup>14</sup>ます。 \*15 地獄変

<sup>13</sup>破句

<sup>14</sup>ぢやと申すこと、これでもお分りになりませぬか。

〔中央柱、魚尾下から下欄外にかけて書き込み。〕

□□の屏風を描かせるなどと申すことは、以

<sup>16</sup>い

〔行間書き込み。〕

□□ての外のことござります。 わたくしは

□□わざわざこのことを申し上げに、横川か

□□も山を下つてまゐつたのでござります。

<sup>18</sup>は

<sup>19</sup>何分にも、〔行間書き込み。 \*19 への挿入部分下欄外にかけて書き込み。〕

〔\*17への挿入部分、一六・一七行目の行間、一七行目の上欄外に書き込み。〕

大殿。

<sup>17</sup>おれはわざわざ添う<sup>18</sup>存じますが、レから

□□良秀は、今度の地獄変の屏風には、魂を打

〔行間書き込み。〕

<sup>20</sup>居りますこと

<sup>17</sup>阿闍梨どのの  
御深切は、

□□ち込んでゐる様子。<sup>20</sup>ゆゑ、<sup>21</sup>今さら止め<sup>22</sup>と

<sup>21</sup>折角のお言葉ながら、<sup>22</sup>への挿入部分、一五・一六行目の行間

<sup>21</sup>への挿入部分、一五・一六行目の行間

<sup>23</sup>申すことは、わたくしからは申されませぬ。

<sup>23</sup>い

<sup>23</sup>申すことは、わたくしからは申されませぬ。

<sup>23</sup>い

□□本やわけにもまわりますまい。<sup>23</sup>。

□□□

<sup>25</sup>懸

東光

〔行間書き込み。〕

□□僧都<sup>24</sup>何か云ひ<sup>25</sup>けやうとする時、<sup>26</sup>近侍出

□□弔<sup>27</sup>  
□□が更にまた□□□□□□□□□□

●●逃侍

□□て来る

康清が徐かに

<sup>1</sup>て、  
<sup>2</sup>お目通りの上、是非。

〔右欄外に書き込み。〕

康清<sup>9</sup>東光。良秀どのが見えました。<sup>1</sup>何か直々に<sup>2</sup>お

<sup>3</sup>申し上げたいことがあると、

□□願ひ致レ<sup>4</sup>た<sup>5</sup>と<sup>3</sup>申すことでござります。

〔左欄外に書き込み。〕〔ここまで一四〔一五〕枚目。〕

〔行頭二文字、上欄外に書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

<sup>5</sup>暫く

<sup>6</sup>から

<sup>8</sup>よ〔行間書き込み。〕

大殿。<sup>4</sup>(●●●)<sup>5</sup>考へて<sup>6</sup>さうか。<sup>7</sup>ここへ通したが●<sup>8</sup>〔<sup>4</sup>への挿入部分、三～五行目の上欄外に書き込み。〕

康清<sup>9</sup>い。<sup>10</sup>しかし殿様。<sup>11</sup>國はぬから

東光<sup>9</sup>。横川の阿闍梨様のおゐでになるところ

□□へお通し<sup>12</sup>せしも、別は<sup>11</sup>差支へはございま

<sup>11</sup>て、何がまた失禮なことでもあると、お困りだらうと存じますが、それでも

大殿。差支へないから●通せと云ふのぢや。

康清 輳光。ほつゝかしこまりました。それではお通

\*12

〔行頭二文字、上欄外に書き込み。〕

□ 輳光 ● も。\*13 元来たところへ入る。

\*12 し申しませう。

\*13 康清はまた徐かに

〔中央柱、魚尾の前後に書き込み。〕

\*14 丁度良秀がま  
ゐつたさうな。

僧都。殿。\*14 直々良秀に申し聞けてもよあ

□ うござ \*15 地獄變の屏風の繪のことに就て、

\*16 〔笑つて〕ますか \*16

\*19 〔その代りにはこの場に於て、如何なるお説があらうと  
も、わたくしは唯聽聞の役、一切口は挿みませぬぞ。〕

\*18 それは

〔行間書き込み。〕

大殿。\*17 \*18 どうかそれはお心まかせにお願ひ致します。

\*19 〔行間書き込み。〕

\*20 康清

□ 輳光 \*20 に導かれて良秀出づ。 輳光は車わば ● ●。

良秀。(平伏して) 直々にお目通りを願ひ、恐れ

□ □ 入つてござります。 □ □ □ □ □ □ □ □ □

大殿。遠慮には及ばぬ。 ずつとこちらへ通つ

□ □ たがいい。 □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □

\*21 で

〔行間書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

良秀。(憎しげなる目) \*21 僧都の方へ注ぎながら) し  
□ □ かし尊い阿闍梨様と御同席は如何かと存

曾都。たやうこ、お曾一わたくしの郷二。

魔障にでもお遇ひになつ  
わたくしや御<sup>一</sup>  
しみに<sup>二</sup>

□□つてゐると聞き及びますと  
\* 2 のことと申しますと

わざと差扣へるわけなので

僧都。大殿のお許しがある上は、左様なこと

□□を申さずと、ずっと通つたらよいではない

□□いか。

大殿。それにまた阿闍梨様には、この度わし  
□□の分付サニ地獄変の屏風の二二二就二、

□□の咲咲けた地獄變の屏風のことには就て  
□直々お訊ねこなゆたハ二ことがおありこな

\* 3  
〔行間に挿入指示。〕

\* 3  
〔\* への挿入部分、

一一) 一七行目の上欄外) 行頭一マス分に書き込み。

良秀。それでは  
ご免下さいまし。  
遠慮なく御同席  
致しませう。

良秀。（急に反抗的な顔付になつて）如何なるこ

□□とを、お訊ねになるかは存じませぬが、法

□□師には法師の心があると同じく、繪師にも  
□□繪師の魄がござります。繪師風情とあ

などつて、迂闊にものをお訊ねにならぬや

□□う、前以てお断り申して置きますぞ。□  
 大殿。これ、良秀。何を申すのぢや。□□  
 僧都。いや、良秀の申すこと、\*<sup>1</sup>本朝第一の繪  
 □□師だけあつて、智羅永寿<sup>\*<sup>1</sup>さすがは</sup>のやう  
 □□で面白うございます。□□□□□□□□  
 良秀（きつとなつて）なに、智羅永寿とな。阿  
 □□闇梨様。智羅永寿とは昔震旦から渡つた  
 □□天狗の名ではございませぬか。□□□□  
 僧都。さうぢや。そちの今の増上慢の言葉、  
 □□智羅永寿にたとへ<sup>\*<sup>2</sup>が</sup>何で悪い。□□□□  
 良秀。いやしくも良□<sup>\*<sup>2</sup>た</sup>秀は天下の繪師、如  
 □□何に尊い横川の僧都ぢやと申しても、天  
 □□狗狗賓におたとへになるは、近頃無禮に  
 □□存じますぞ。（調子を変へて）おしかしかや  
 □□うな言葉づかひを、一々咎め立て致<sup>レサム</sup>  
 □□すのも

〔行間書き込み。〕

〔二〕まで一六【一七】枚目。〕

□□のお訊ねを、良秀改めてお伺ひ致したう

□□存じます。□□□□□□□□□□□□□□□□

僧都。それでは改めて訊ね申さう。先づ訊く

□□が、そもそもそちは薦道<sup>\*4</sup>とは如何なるも

□□のと心得居るのぢや。【<sup>\*4</sup>地獄□□□□□□】

〔<sup>\*1</sup>への挿入部分、右欄外から、四行目までの下欄外に書き込み。〕

〔<sup>\*1</sup>ここまで一七【一八】枚目。〕

\*1 弥陀の淨土に対し五趣●蓮と名づくる五つの境界のひとつ●でござりますが、  
●●地獄の外に餓鬼、畜生、人、天●の四つがありますが、

良秀。（冷かに笑つて）されば地獄とは、<sup>\*1</sup>地下の

□□牢獄と申すことかと存じます。梵語に

□□ては那落迦、即ち俗に云ふ奈落のことで

□□ございまして、総じてこれを三●<sup>\*2</sup>に別●

□□ます。□□□<sup>\*4</sup>類<sup>\*5</sup>のうちの第一と□□<sup>\*2</sup>類<sup>\*3</sup>ち

僧都。うん、その三●<sup>\*4</sup>申すは。<sup>\*8</sup>その傍にある

良秀。一は根本地獄<sup>\*6</sup>八大地獄、<sup>\*7</sup>●<sup>\*8</sup>並<sup>よな</sup>に加<sup>よる</sup>は「一字分下欄外にかかる。」

□□●八寒地獄。<sup>\*6</sup>としての<sup>\*7</sup>或<sup>も</sup>ひはそれを八熱地獄

僧都。第二は。<sup>\*9</sup>八大地獄の四門に四ヶ所、合せて

良秀。二は<sup>\*9</sup>近辺地獄<sup>○</sup>十六<sup>10</sup>遊増地獄。

\*10 ケ<sup>ハ</sup>ス<sup>ル</sup>づつある

〔魚尾の下方に書き込み。〕

僧都。第三は何ぢや。□□□□□□□

「行間書き込み。」

\*12 これは

\*13

〔以下、\*13への挿入部分、八〇行目の行末各三マス及び一〇・二行の行間から用紙末尾までの下欄外に書き込み。〕

良秀。

\*11 孤独地獄。

\*12 山間曠野樹下<sup>森中</sup>空中<sup>など</sup>にあるも

□□□。

\*11 二は

猶詳しく申せば、瞻部洲の地下五

□□□百躰繕那のところに地獄はあつて、先づ

□□□第一を等活<sup>ヒ</sup>云ふ。これより次第に、黒

□□□繩、衆合、號叫、大叫、炎熱、大熱、無

□□□間の八つ、これを八大地獄、或<sup>ヒ</sup>は八寒

□□□地獄に對して、八熱地獄とも申すので

□□□ざいます。□□□□□□□□□□□□□□□□

僧都。うん、それでは八寒地獄と云ふのは。

良秀。前の八大地獄は、堅に重つたもので

□□□ざいますが、八寒地獄は横に連な<sup>シ</sup>居

\*1

□つて

〔ここまで一八【一九】枚目。〕

〔行間書き込み。〕

\*13 八寒八熱地獄の如くに定まるところあるにあらず。各人制禦の惑するところの地獄にして、或ひは虚空、或ひは山野に散在して居ります。

□□々、優婆<sup>うは</sup><sub>2</sub>羅<sup>ら</sup>、波嚩<sup>は</sup><sub>3</sub>摩<sup>ま</sup>、拘物頭<sup>くもつづ</sup>、分陀利<sup>ふんだり</sup>

□□この八<sup>2</sup>鉢<sup>つ</sup>に<sup>3</sup>頭<sup>く</sup>別れて居りまして、

<sup>4</sup>名

<sup>5</sup>しい

<sup>6</sup>人

〔行間書き込み。〕

<sup>6</sup>この地獄に落ちました

□□この<sup>4</sup>畫葉<sup>は</sup>の意味は激<sup>5</sup>寒<sup>さ</sup>のために、<sup>6</sup>罪<sup>7</sup>の<sup>8</sup>の〔<sup>6</sup>への挿入部分、七<sup>7</sup>八<sup>8</sup>九行目の行間にかけて下欄外書き込み。〕

□□身が、或ひは青い蓮華の如く、或ひは紅

<sup>8</sup>ころ

〔行間書き込み。〕

□□の蓮華の如く、<sup>9</sup>裂<sup>く</sup>けると<sup>10</sup>本<sup>お</sup><sub>8</sub>に由來してゐ

□□ると、寡聞ながら聴き及んで居ります。

僧都。成程<sup>さすがに</sup>地獄<sup>じごく</sup>變<sup>か</sup>の屏風<sup>びやう</sup>を描<sup>か</sup>か<sup>う</sup>

□□<sup>11</sup>と<sup>12</sup>あるだけあつて、<sup>9</sup>そ●れでは<sup>13</sup>の數は●

□□すべてでいくつあるか知つて居るか。□

良秀。根本地獄の八熱に、各<sup>10</sup>遊<sup>11</sup>増<sup>12</sup>の<sup>13</sup>十六<sup>14</sup>ありの

□□あり。合せて百三十六地獄。□□□□

僧都。してまた地獄に墮する業因は。□□□

良秀。十惡すべて地獄に墮つ。□□□□□

僧都。さればその十惡とは。□□□□□

良秀。殺生、偷盜、邪淫、妄語、兩舌、惡口、

<sup>1</sup>貪

<sup>2</sup>を

〔ここまで一九〔二〇〕枚目。〕

□□綺語、●\*<sup>1</sup>慾、瞋恚、邪見、これは\*<sup>2</sup>十惡業、  
 □□或ひは又十不善業と申します。□□□  
 僧都。それほど地獄のことを知つてゐるもの  
 □□が、如何に大殿のお吩咐ぢやとは云へ、  
 □□世にも怖ろしい地獄變の屏風を、描かう  
 □□と思ひ立つたのぢや。□□□□□□□□□

〔\*<sup>3</sup>画  
 \*<sup>4</sup>し〕

良秀。藝\*<sup>3</sup>道の上から申すますと、地獄であら  
 □□うが何であらうが、見る●のの魂を振り動  
 □□かすやうな、力のある優れたものを描けばよ  
 □□いのでござります。いや、\*<sup>5</sup>画道ばかりなく、す

〔行間書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

□□べての藝と申すものは、□□□□□さう云ふも  
 □□のではないかと、憚りながら存じます。□□□  
 僧都。●か●いや、いや、如何に一藝一能に秀  
 □□でた者でも、怖ろしきことを怖ろしとせ  
 □□す、醜き●のを醜●とせぬやうなものは、  
 □□必竟地獄に墮つるであらうぞ。□□□□□

良秀。（冷やかに笑つて）画道のため藝のためな  
 □□らば、地獄に墮つること位、何まで厭ひ  
 □□怖れませうや。□□□□□□□□□□□□  
 僧都。それでは如何あつても地獄變の屏風は、

\*<sup>1</sup>ひて

□□兎事描き上げ\*2見せると申すのか。□□  
 良秀。一旦描かうと思ひ定めました上は、命  
 □□にかけても描かねばなりませぬ。まあ阿  
 □□闇梨様にはかやうなことに よしなき心  
 □□を配らるるよりも、御八講の朝廷夕座、  
 □□讀經供養でもなすつてゐたら、よろしか  
 □□らうと存じます。□□□□□□□□□□  
 僧都。ええ、またしても無禮なことを。（大殿  
 □□に）殿。先刻申し上げたことを、どうかお  
 □□忘れにならぬやう。それではこれでお暇

\*<sup>2</sup>し

〔行間書き込み。〕

〔ここまで二〇ノ二二枚目。一二行目以降白紙。〕

□□●申<sup>2</sup>●ます。□□□□□□□□□□□□  
 □□横川の僧都席を蹴るやうにして去る。□

〔右欄外書き込み。〕  
 〔ここまで二〇ノ二二枚目。一二行目以降白紙。〕

□□\*<sup>1</sup>良秀は冷然として動かず。やがて元の座  
□□\*<sup>1</sup>大殿は見送りに立つたが、□に付いた大殿の  
□□方に向つて詫びるやうに一禮する。□□

良秀。画道のことと相成りますと、兎角一徹  
□□になり勝でございまして、つい失禮なこ  
□□とを申上げたり致すやうになります。大  
□□殿様からも横川の阿闍梨様に、後日よし  
□□なにお取りなしおきを願ひたう存じます。  
大殿。承知致した。しかし今・<sup>日</sup>の二人の地獄  
□□問答は、いろいろわしも教へられるとこ

□□に

〔行間書き込み。〕

□□ろがあつた。阿闍梨様の云はれること\*<sup>2</sup>も、  
□□またそちの云ふこと\*<sup>3</sup>も、いづれにももつ  
□□ともな道理がある。<sup>\*3</sup>に□<sup>\*2</sup>に  
□□云ひ争ふたところで、論議の盡きる時は  
□□あるまい。□□□□□□□□□□<sup>\*4</sup>横川の□  
良秀。大殿の前もはばからず、尊い阿闍梨\*<sup>4</sup>僧  
□□都に對し無禮の段々、どうかお許し下さ

□□いまし。（形を改めて）さて、大殿。今日直  
□□々にお目通りを願ひましたのは、兼ね兼

〔\*<sup>1</sup>  
に就て〕

〔（二）まで二一【二三】枚目。〕

□□ねお吩咐になりました屏風のこと\*<sup>1</sup>でござい

□□いますが、わたくしも日夜に丹誠を抽ん

□□で、筆を執りました甲斐が見え、もは

□□やあら\*<sup>2</sup>し出来上つたも同然でございます。

大殿。（慌て\*<sup>2</sup>まで）それは目出度い。予も満足

□□ぢや。□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

〔\*<sup>4</sup>  
や〕

〔行間書き込み。〕

良秀。\*<sup>3</sup>（いえ\*<sup>4</sup>、それが一向目出度くはござりま  
□□□□\*<sup>3</sup>（やや腹立たしげに）せぬ。（伏目になりて）兎

□□も角あらましは出来上りましたが、唯ひ

□□とつ今以て、わたくしには描けぬところ

□□があるのでござります。□□□□□□□□

大殿。（問ひ返すやうに）なに、描けぬところが

□□ある。□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

良秀。左様でござります。わたくしは總じて



\*4 承知致してゐる。

火の手を、目のあたりに眺めました。よ  
ぢり不動の火焔を描きましたのも、実は  
あの火事に遇つたからでござります。御  
前もあの繪は御承知でございませう。□  
大殿。  
\*<sup>4</sup>しかし罪人は如何ぢや。  
\*<sup>5</sup>獄卒は見たこ  
とがあるまいな。  
\*<sup>5</sup>まだ

\* 6 直

\* 5 まだ

良秀。鐵・鎖に縛められたものは、  
くしの手近にでも見ることが出来ます。  
怪鳥に悩まされるものの姿も、わたくし  
には何時でも寫し取ることが出来るので  
ございます。されば罪人が地獄の呵責に

\*<sup>1</sup>ならば

□□苦しむ有様も\*<sup>1</sup>、わたくしには如何●やうに  
□□も描くことが出来ると申しても、さほど  
□□過言でもござりますまい。（気味の悪い苦  
□□笑を漏らしながら）それから又獄卒は、夢  
□□現に幾度となく、わたくしの目に映りま

〔行間書き込み。〕

〔二〕まで二三【二五】枚目。

〔\* 4 への挿入部分、一三行〔一三・一四行目の行間にかけて上欄外に書き込み。〕

□□した。或ひは牛頭、或ひは馬頭、或ひは  
 □□三面六臂の鬼の形が、音のせぬ手を拍き、  
 □□聲の出ぬ口を開けて、わたくしを虐みに  
 □□まゐりますのは、殆んど毎日のことと申  
 □□してもよろしうございませう。わたくし  
 □□の描かうとして描けぬのは、そのやうな  
 □□ものではございませぬ。□□□□□□  
 大殿。それでは何が描けぬと申すのぢや。□  
 良秀。（じつと大殿の顔を見詰めながら）わたく  
 □□しは屏風の唯中に、檳榔毛の車が一輛、  
 □□空から落ちて来るところを描かうと思つ  
 □□て居ります●。（間を置いて）その<sup>2</sup>中には、  
 □□のでございます。顔は煙に咽びながら、  
 □□一人のあでやかな上襦が、猛火<sup>\*2</sup>車の<sup>2</sup>中の  
 □□に黒髪を乱しながら、悶え苦しんでゐる  
 □□のでございます。顔は煙に咽びながら、  
 □□眉をひそめて空ざまに、車蓋を<sup>1</sup>仰ぎ、手  
 □□は下簾を引つちぎつて、降り<sup>\*1</sup>じつと振り  
 □□かかる火の雨を防がうとして居ります。

〔ここまで一一四【一一六】枚目。〕

●そしてその周りには、怪しげな鳶鳥が幾  
十羽となく、嘴を鳴らしながら飛び廻つ  
てゐるのでござります。（深い歎息をつい  
て）ああ、それがわたくしには描けませぬ。  
牛車の中の上襦が如何してもわたしに  
は描くことが出来ませぬ。  
大殿。それでわしに如何して呉れいと申すの  
ぢや。  
良秀。如何か檜榔毛の車を一輛、わたくしの  
見てゐる前で、火を懸けて頂きたいので  
ございます。さうして若し出来ますなら  
ば。  
良秀はさう云ひ懸けて、暗示的に大殿の  
顔をじつと見詰める。大殿もじつと良秀  
と顔を見合せてゐたが、やがてその面に  
暗い影が現はれたかと思ふと、急にけた  
たましく聲を立てて笑ふ。  
大殿。おお、承知致した。万事その方が申す

〔一七〕まで一二五枚目。

\*1  
ぬ

〔行間書き込み。〕

□ 通りに致して遣はさう。出来る出来● \*1 の  
 □ 詮議は無益の沙汰ぢや。（もう一度もの狂  
 □ ほしく笑つた後）よし、よし、檳榔毛の車  
 □ にも火を懸けやう。またその中にはあで  
 □ やかな女●一人、上腐の装ひをさせて乗  
 □ せて遣はさう。\*2 炎と黒煙とに攻められて、  
 □ 車の中の女が悶<sup>2</sup>紅蓮のえ死する。それ  
 □ を描かうと思ひ付いたのは、流石に天下  
 □ 第一の繪師ぢや。褒めてとらす。おお、  
 □ 褒めてとらすぞ。□□□□□□□□□□  
 良秀。（その言葉を聴くと崩折れたやうに疊に  
 □ 両手をついて）難有い仕合せに存じまする。  
 大殿。（呼ぶ）誰か居らぬか。□□□□□□  
 □ 女房狹霧出づ。□□□□□□□□□□  
 狹霧。お召しになりましたか。□□□□□□  
 大殿。おお、良秀に土器を取らす。御酒<sup>みき</sup>の用  
 □ 意を致せ。□□□□□□□□□□

〔（）〕まで一六 【二八】 枚目。」

狹霧。かしこまりました。

女房達御酒を運んで来るが、良秀はまだ疊に両手をついたまま、身動きもしづに考へ込んでゐる。遠く若殿の朗詠の聲が聴こえて来る。

□□堀川の邸。□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□長廊下。

□□夜。月明り。

□□遣戸を開けて良秀出づ。大分酔つてゐる

□□若き近侍貞光紙燭を持ちて先に立つ。□

貞光。氣を付けてお出でなさいまし。危なう

ごさいますぞ。(くわ)

良秀。ハや、この位の酒ではまだ太丈夫で

□□ざります。殿様こは大分お辭ひになり、

お就寝になつて、まはれをゆゑ、御矣。

お前弱いなってしみれたりと御披拂

□□を申上いませなんかか  
どふかよみし

〔二三行目。〕  
〔二三行目まで二七〔二九〕枚目。六行目以降白紙。〕  
〔一・二行目の行間に位置。二行取り。〕

三行目。

貞光。

<sup>\*1</sup> 良秀。  
これからは  
月明りで  
歩いて往  
かれます。  
どうかお引き  
取り下さい。  
貞光。それでは  
気を付けてお出  
でなさいまし。  
貞光去る。

□□申上げて下さいまし。  
□□□□□□□□□□  
貞光。かしこまりました。  
□□□□□□□□□□

〔\*1への挿入部分、一六・一七行目の行間に挿入指示。一三～二〇行目の上欄外に書き込み。〕

□□猿が後を追ふやうにして出で来り、良秀  
□□の裾を頻りに引つ張る。□□□□□□□□

良秀。何だ。猿めか。如何しろと云ふのだ。

□□猿は気も狂はむばかりに歯をむき出し、  
□□けたたましく啼き立てる。□□□□□□□□

良秀。ええ、うるさい。何をするのだ。□□

□□蹴放すけれども猿は中々離れずに、一し

□□よう懸命に裾を引つ張●<sup>\*1</sup>ながら●<sup>\*2</sup>狂ほし

\*1  
り\*2  
もの

〔行間書き込み。〕

□□げに啼く。□□□□□□□□□□

〔行間上欄外にこの行間への挿入の指示線、塗りつぶされた形で残存。〕

良秀、（気が付いて）しかしこの猿の様子は、如

□□何も唯事とは思はれぬ。（點頭いて）うん、わ

□□しに来いと云ふのか。□□□□□□□□

□□良秀<sup>\*3</sup>五六歩猿に引つ張られて往き懸けた時、

□□遣戸<sup>\*3</sup>がの向ふで人の云ひ争つてゐる聲<sup>が</sup>

□□慌ただしいうちにもひつそりと、廊下の方

□□へ傳はつて来る。□□□□□□□□□□□□

夕月の聲。あれ、何をなさいます。どうかお

□□離し下さいまし。□□□□□□□□□□□□

殿様の聲。何もさう遁げるには及ばぬではな

□□いか。□□□□□□□□□□□□□□□□

夕月の聲。いえ、いえ、いけませぬ、いけま

□□せぬ。そのやうな悪戯をなされますと、

□□宿直の者を呼びますぞえ。□□□□□□

殿様の聲。さうか<sup>\*4</sup>くな<sup>\*5</sup>を云ふものではない。

<sup>\*4</sup>頑

<sup>\*5</sup>事

□□さあ、わしの云ふことを。□□□□□□

夕月の聲。(叫ぶ。)あれ、誰か来て。□□□□□

殿様の聲。(荒々しく)ええ、勝手にするがいい。

□□激しく倒れ懸かる<sup>\*1</sup>もの音がすると同時に、

□□遣戸が<sup>\*1</sup>體<sup>體</sup>を打ち付ける彈かれたやうに倒

□□れて、袴や袴を<sup>●</sup>どけなく乱した夕月が、

〔行末一字分、下欄外に書き込み。〕

〔左欄外に書き込み。ここまで二二九【三二】枚目。〕



〔一三・「四行目行末三マスから下欄外にかけて書き込み「座りながら」の脱落か。〕

## 〔行間書き込み。〕

興秀。もう一人の弟子秀起、そ<sup>●</sup><sub>5</sub>と入つて来

□□て、低い聲で良信に叫く。

\* 6  
です

\* 5  
と  
つ

## 〔行間書き込み。〕

〔二〕まで三一〔三三〕枚目。

□□を見てからは、如何も心配でなりません。  
良信。その心配はわたしとても同じことだ。

□□それから直ぐ後であらう。ほんやりここ

□□へ入つて来られると、おれは少し午睡を

□□しやうと思ふが、近頃は如何も夢見が悪

□□い、就ては眠つてゐる間枕もとに座つて

□□ゐて貰ひたいと云はれるのだ。□□□

秀起。如何して急にかう心弱くおなりになつ

□□たものか、昨日堀川かやお●<sup>\*1</sup>何ごとがあ

□□つたのではありますま<sup>\*1</sup>のお邸でいか。□□

良信。何も仰しやらぬから分らぬが、或ひは

□□何事があつたのかも知れない。しかし今

□□のところは、よくお睡みの御様子だから、

□□安心してあちらに往つてゐたがいい。□

秀起。それではあちらに往つて居ります。□

□□秀起は去る。□□□□□□□□□□□□

□□秀起は去る。□□□□□□□□□□□□

□□たやうにもの凄じい叫び聲を立てる。□

〔二〕まで〔二〕〔三四〕枚目。〕

良秀。□なに、おれに来いと云ふのだな。何□處へ——何處へ来いと云ふのだ。なに、  
 □□奈落へ来い。炎熱地獄へ来い。——誰だ、  
 □□さう云ふ貴様は。——□おお、誰だと思□つたら貴様おのれだな。おれもおのれだ  
 □□らうと思●てゐた。なに、迎へに来たと  
 □□云ふのか。うん、さうか。だから来い。  
 □□奈落へ来い。奈落にはおれの娘が待つ  
 □□てゐると云ふのか。なに、早く——この車  
 □□に乗つて来い。待つてゐるからこの車に  
 □□乗つて、□奈落へ来いと申すのか。ううん、  
 □□おのれ——□□□□□□□□□□□□  
 □□良秀は矢庭にそこに刎ね起きたが、まだ  
 □□悪夢の中の異類異形が瞳から去らないや  
 □□うな眼差で、じつと空を見つめてゐる。  
 □□良信は叫び聲を聴くと同時に、繪の具を  
 □□溶く手を留めておろおろし●がら「お師匠  
 □□様、しつかりなさいまし」と云ふ言葉を繰

□□り返してゐたが、気が付いたのでやつと  
 □□安心して聲をかける。□□□□□□□□□  
 良信。ああ、お師匠様。気がお付きになりま  
 □□したか。□□□□□□□□□□□□□□□  
 良秀。うん。地獄の夢をさまざまと見た。剣  
 □□山刀樹も焼き爛れるかと思はれるばかり  
 □□の紅蓮の猛火 もの凄じく渦を巻く無  
 □□明の闇の黒煙—金<sup>\*1</sup>砂子を撒き散らした  
 □□やうな火の粉までが、<sup>\*1</sup>のまだありありと  
 □□見えるやうな。(急に感興を覚えたやうに)  
 □□良信。わしは鎖で縛られた人間が見たい。  
 □□氣の毒でも暫くの間、わしのするやうに  
 □□なつてゐては呉れまいか。□□□□□  
 良信。(脅えたやうに)それはお師匠様のお吩咐  
 □□ならば、何なりと<sup>\*2</sup>仰せの通りに致します  
 □□が。□□□□□<sup>\*2</sup>も□□□□□□□□□□  
 \*<sup>3</sup>うん、それではわしの云ふ通になつてゐて呉れ  
 良秀。ええ、何を愚図<sup>ヤタヒ</sup>すわるの、おや。

〔行間書き込み。〕

〔二〕まで〔三〕〔三五〕枚目。〕

□□□ると云ふのぢやな。よおし。□□□□□□□□□  
□□良秀は<sup>\*4</sup>鐵の鎖を取り出すと、もの狂はし  
□□く良信<sup>\*4</sup>用意してあつたに飛びかかる。□

良信。お師匠様。□□□□□□□□□□□□□□□  
□□良信は良秀の勢ひに驚いて遁げ廻る。良  
□□秀は鎖を引き摺りながら追ひ●廻すうち  
□□に、恰も獸<sup>\*1</sup>如<sup>\*2</sup>け<sup>\*3</sup>きもの凄じき形相と  
□□なる。や<sup>\*1</sup>惡魔外道<sup>\*2</sup>のがて良秀は良信の  
□□背中に乗りかかり、両の腕を捻ぢ上げて、  
□□●鐵の鎖でぐるぐる巻きにしてしまふ。

良秀。(呻くやうに咳く) ●<sup>\*2</sup>づ第一が鐵の笞に打

<sup>\*2</sup>先

□□たれる殿上人ぢや。□□□□□□□□□  
□□良秀は紙と筆とを取りて良信の姿を寫す。  
□□やがて鎖を強く引<sup>\*3</sup>すと、良信は床を鳴  
□□らしながら横倒しになる。□□□□□□□

〔行間書き込み。〕

良秀。(同じやうに獨り言つ) 次は●●<sup>\*3</sup>に胸を

<sup>\*3</sup>矛

〔ここまで三四【三六】枚目。〕

\*<sup>4</sup>蝙蝠のやうに逆さまになつた生受領

〔行間書き込み。〕

□□刺され●●●●\*<sup>4</sup>ぢや。□□□□□□□□

□□良秀は更にもう一枚□良信の姿を寫す。

□□寫し終ると又鈴を引きて形を変へる。□

良秀。（前と同じやうに）今度は千曳の盤石に

□□體を壓された念佛僧ぢや。□□□□□□

□□同じやうに寫生をし、終るとまた形を変

□□へるために鎖を引く。□□□□□□□□

\*<sup>5</sup>これは□□□□□□□□

良秀。（呻くやうに）うん、\*<sup>5</sup>面白い。●●●●

\*<sup>1</sup>毒龍の頸に嚙まる

□□の嘴にかけやれな\*<sup>1</sup>陰陽師の姿そつくり

□□ぢや。□□□□□□□□□□□□□□□□

□□寫生、鎖を引くこと前と同じ。□□□□□□

良秀。（狂喜して）あれ見い。牛頭馬頭の鋸叉きょさまた

□□に髪をからまれて、蜘蛛のやうに手足を

□□縮めた青女房がそこにあるぞ。□□□□□

□□良秀が夢中になつて良信のおまえおまえおまえ姿

□□を寫生してゐるうちに、部屋の隅に置い

〔こ〕まで三五【三七】枚目。  
〔右欄外に書き込み。〕

□□である壺の中から、まるで黒い油が流れ  
□□出すやうに、一匹の蛇が這ひ出して来て、  
□□鎖の喰ひ込んだ良信の頸へその舌の先を  
□□觸れやうとする。□□□□□□□□□□□□  
良信。（びつくりして起き上がる）ああ、蛇が。

□□お師匠様。蛇がまゐりました、蛇がまゐ  
□□りました。□□□□□□□□□□□□□□  
□□良秀<sup>\*2</sup>さすがにぎよつとしたが、咄<sup>\*3</sup>嗟に身

【<sup>\*2</sup>も  
<sup>\*3</sup>を】

□□をかが□め<sup>\*4</sup>●蛇●<sup>\*5</sup>吊り下げる。□□□□

良秀。（忌々しさ<sup>\*4</sup>尾を摑んでうに）不届きもの

□□めが。おのれゆゑにあつたら惜しい一筆

□□を、遂に描き損じてしまふたぞ。折角の

□□ところへ這ひ出し居つて、不埒なやつ、

□□すつ込んで居れ。□□□□□□□□□□

□□良秀はそのまま蛇を隅の壺の中に抛り込

□□んだが、すつかり感興を失つてしまつた

□□様子。夢から覚めたもののやうに、冷た

〔行間書き込み。〕

〔ここまで三六【三八】枚目。〕

□□い顔付で良信の鎖を解いてやる。□□□  
 良秀。（空洞のやうな聲音で）御苦勞であつた。  
 良信。（手足をさすりながら）お師匠様。お役に  
 □□立ちましたか。□□□□□□□□□□□□□□  
 良秀。（不機嫌に）立たうが立つまいがよいでは  
 □□ないか。（寫生した紙を拾ひ集めながら）□  
 □□殿上人——生受領——念佛僧——陰  
 □□陽師——青女房——まだ足らぬわ。  
 □□毒龍の頸<sup>あご</sup>に噛まるる女の童——高足駄  
 □□を穿いた侍学生——それに大事なのは  
 □□昨日堀川の大殿にお願ひした、\*<sup>1</sup>中空か  
 □□ら宙に舞ふて落ちて来る、  
 □□檳榔毛の牛車ぢや。火焰□  
 □□に包まれた簾の中には、女御更衣とも  
 □□見まがふばかり●、綺●\*<sup>2</sup>びやかに装つた女  
 □□房が、丈の黒髪をなびかせて、悶え苦し  
 □□んでゐる姿が見える。はゞまづま。□□□

\*<sup>2</sup>羅

\*<sup>1</sup> 地獄の風に  
吹き上げられ

〔左欄外に書き込み。ここまで三七【三九】枚目。〕  
 \*<sup>1</sup>への挿入部分、一七〇一八行目の行末六マス分を  
 使用し、書き込み。〕

良秀はうつとりと地獄繪を目に浮べながら凄惨に笑ふ。そこへ恰もその笑ひ聲に誘はれたやうに、●屏風の蔭から<sup>1</sup>一羽の耳木菟が飛び出しで来る。□□□□□<sup>1</sup>猫のやうな形をした□□良信。（驚いて叫ぶ）ああ、お師匠様。異様な鳥が飛んでまゐりました。□あれ、あのやうにぐるぐると部屋の中を飛び廻つて居ります。□□□□□□□□□□□□□□□□良秀。（うん、あれもこの地獄變の屏風の中に描かねばならぬ鳥なのぢや。□□□□□□□□良信。（氣味悪げに）一体何と云ふ鳥でございませう。わたくしはついぞまだ見たこと□□がございませんが。□□□□□□□□□□良秀。（嘲笑ふやうに）なに、見たことがない。都□□育ちの人間はそれだから困る。これは二□□三日前に鞍馬の獵師がわしに呉れた、耳□□木菟と云ふ鳥なのぢや。唯こんなに馴れ

□□てゐるのは澤山はあるまい。□□□□□□□

□□良秀が微かに口笛を吹くと、耳木菟は直ぐ□□に飛び下りて来てその手に留まる。□□

良秀。（鳥の背を撫でながら）よし、よし、賢い鳥□□ぢや。（思ふところありげに冷たく笑つて）それ、□□よいか。首尾よく勤めたら餅をやるぞ。

□□良秀が合図をするやうに、<sup>\*1</sup>背中を叩くと、

□□耳木菟は急に飛び立つて、<sup>\*1</sup>軽く

□□を突きに懸かる。□□□□□□□

良信。あれ、何をするのだ。お師匠

□□様。助けて下さいまし。助けて下さいま

□□し。□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□良信。●<sup>\*3</sup>さういふ。ながら、立つては防ぎ、

□□座つては遊び、部屋の中をあちらこちら

□□と逃げ廻る姿を、良秀はまた紙と筆とを□□取り上げて一心に寫す。□□□□□□□□

良秀。（ほほ笑みながら）うん、面白い形ぢや。

\*3 が

\*4 叫び

〔行間書き込み。〕

<sup>\*2</sup> 鏡い啼き聲  
を立てながら

〔九・一〇行目行末四マスより下欄外にかけて書き込み。〕

かうしてじつと寫してゐると、猿酒の餓えたやうな地獄の匂ひが、何處からともなく流れて来る。耳木菟は部屋の中を逐ひつ逐はれつ走り廻る。良秀が冷然と寫生をしてゐる間、良信と良信。(叫ぶ) お師匠様。お師匠様。どうか吐けて下さいまし。ああ、怖ろしい。かうしてゐるうちにわたくしは、この怪しき鳥のために窓●き殺されてしまひます。

良信。(叫ぶ) お師匠様。お師匠様。どうか助

\* 1  
ああ、

\*1 痛い。畜生。何をするのだ。もう

□□そのままにはして置かぬぞ。

□□良信は両袖で鳥の嘴を防ぎながら走り廻

□□つてゐるうちに、結燈臺を蹴倒してしま

ふ。部屋の中は真つ闇になつて、耳木蔭

□□の羽音ばかりが氣味悪く聽こえる。

良秀。(あつこし) (ザニ立つ土つた氣勢) (秀記)、

秀起

〔ここまで三九〔四二〕枚目。〕

〔行間書き込み。〕

〔行末一字、下欄外に書き込み。〕

秀起。弟子どもは居らぬか。急いで  
持つてまゐれ。灯ぢや、灯ぢや。  
間もなく秀起を先きに弟子達二人、各灯  
を手に持つて、急いで部屋に入つて来る。

秀起。お師匠様。如何なされました。□□□  
良秀。わしは如何も致さぬが、奥備は如何

\*1  
わしの今

□□せわむ。\*1 寫した紙を見失ふたのが心かが  
堺起りぢや。

良秀は●そこに気を失つて倒れてゐる良

□□信の方は見向きもしずに、一しよう懸命  
□□に今描き棄てた紙を恰ひ集めてゐる。□

秀起。おお、良信どのが気を失ふて倒れてゐ

る。おお、床も疊も一面に油だらけぢや秀起は良言を泡き起す。

秀起。良信□  
\*<sup>2</sup>油の流れた上に倒れてゐるどの、良信

〔右欄外に書き込み。〕

□□しい鳥は如何致した。□□□□□□□□秀起。怪しい鳥と云ふと。□□□□□□□□良信。何でも二三日前に鞍馬の獵師が持つて□□來たと云ふ耳木菟と云ふ鳥ぢや。□□□良信は脅えたやうに四辺を見廻してゐた□□が、そのうち帶水<sup>\*3</sup>聲を立てる。□□□良信。あつ、あす<sup>\*3</sup>驚いてこにゐる、あすこに□□ゐる。首から翼へかけて、あの黒い蛇が、□□<sup>\*4</sup>きりきり巻きにしてのたうつてゐる。あ

すつかり

\*<sup>1</sup>秀起。おお、成程、怖ろしい。怪しい鳥を黒い蛇が。

□□あ、怖ろしい。□□□□□□□□□□□□

\*<sup>1</sup>良秀はその前からこれを見付けて、夢中□□になつて寫してゐたが、腹立た<sup>しげ</sup>に弟

□□子達に向つて叫ぶ。□□□□□□□□□□

良秀。ええ、うるさい。<sup>\*2</sup>黙つて居らぬか。地□□獄変の屏風の<sup>\*2</sup>折角●心に寫して居るのに、

〔左欄外書き込み削除。〕〔〕まで四一〔四三〕枚目。〕

〔右欄外に書き込み。〕

〔行間に挿入指示。〕

\*<sup>4</sup> 何を他愛もない。<sup>a</sup> 今夜

中には、なくてはならぬよい得物ぢや。  
はうはうはう。  
良秀もの凄じく笑ふ。弟子達は怖ろし  
さうに蛇に巻かれた耳木菟の方を眺める。  
下の巻  
その一  
「雪消の御昕」<sup>(アヒ)</sup>と呼ばれてゐる洛外の山荘。  
荒れ果<sup>\*</sup>たる庭。  
月のな<sup>\*1</sup>て い暗い夜。遣水の音。五位鷺の聲。  
四辺を警めるやうな様子で、惟清と貞光  
とが、松明を手にしながらインでゐる。  
惟清。いよいよ怖ろしい夜が来たのう。第一

この雪消の御昕と云ふところからかゆ<sup>\*2</sup>稀  
有<sup>\*3</sup>なところぢや。夜な夜な怪しい緋の袴が  
貞光。はうはうはう。  
何が怖ろしい。<sup>\*4</sup> 何がある。  
たかが檳榔毛の車を焼き棄てるだけのこ

\*<sup>2</sup> して

荒れ果<sup>た</sup>たる庭。月のな<sup>て</sup><sub>一</sub>い暗い夜。遺水の音。五位鷺の聲。四辺を警めるやうな様子で、惟清と貞光とが、松明を手にしながら lain でゐる。惟清。いよいよ怖ろしい夜が來たのう。第一

〔ここまで四二〔四四〕枚目。以下二一行以降白紙。〕  
〔二行取りで巻名記載。一・二行目の行間に位置。〕  
〔二行取りで記載、三・四行目の行間に位置。〕

〔行間、書き込み。〕

地にも付かず廊下を歩むと云ふ取沙汰もある

〔\*<sup>3</sup>への挿入部分、一二二〕

〔\*4 への挿入部分、一一〇三行目の上欄外に書き込み。〕

〔二〕まで四三【四五】枚目。」

□□とではないか。□□□□□□□□□□□□□  
 惟清。いや、いや、そなたはまだ知らぬのぢ  
 □□や。あの車にはさる女房が乗せられてゐ  
 □□て、車ともども焼き殺さると云ふこと  
 □□ぢや。□□□□□□□□□□□□□□□□□□  
 貞光。それともわしの目から見れば、まる  
 □□で戯れごとのやうなこと。先年陸奥の戦  
 □□ひに餓えて、人の肉を食つて以来、鹿の  
 □□生角さへ裂くやうになつた、このわしが  
 □□ここに控へてゐる上は、まあ落ち着いてゐ  
 □□るがいい。□□□□□□□□□□□□□□  
 惟清。いや、いや、中々落ち着いてはゐられ  
 □□ぬ。そなたは如何に強者でも、力ばかり  
 □□では防げぬことが、この世の中にはいく  
 □□らもある。とかくの噂のある雪消の御町  
 □□も、今夜のやうなことがあつてからは、  
 □□いよいよ怖ろしいと●ろとならう。□□  
 貞光。（嘲笑ふやうに）そなたも陸奥の戦ひに出

□□た時には、あつぱれ強弓を引いた武士で  
□□はないか。如何かに年老いたとは云へ、  
□□それではあまりに情ないぞ。□□□□□  
惟清。何と云はれても今夜のことは、□□わしに  
□□は怖ろしうてならぬのぢや。おお、\*<sup>1</sup>五位  
□□驚の聲までが、今夜何となく不  
□□氣味に聽こえる。(縁の方を見て)  
東光。何をそのやうは帶えむやうがや。大臣  
□□様がお出ましのやうぢや。□□□□□  
□□二人は縁先の方へゆく。□□□□□  
□□近侍のもの大殿油に火を點す。それと殆  
□□んど同時位に、大殿は近侍の者五六人を  
□□従へて出で、縁に近い円座の上に胡座を  
□□かく。□□□□□□□□□□□□□□□  
大殿。用意がよけば、車を庭先へ引き据ゑい。  
□□それに應ずる仕丁等の聲同音に聽こえ、  
□□やがて牛を附けず、轅の黒い、金物の黄  
□□金のきらきらと光る檳榔毛の車が、太勢  
\*<sup>1</sup>

\*<sup>1</sup> 空を鳴  
き過ぎる

〔\*<sup>1</sup>への挿入部分、一九二〇行目の行末三マスを使用し、書き込み。〕  
〔ここまで四四【四六】枚目。〕

□□簾を重く垂らしたまま、大勢の仕丁  
\*1 青い

\* 1  
青い

大殿。良秀は如何致した。申付け置いたる通  
り、良秀には、<sup>その</sup><sub>2</sub>庭先に、かねて設け  
の内座與へ<sub>2</sub>車こ近い。□□□□

良秀は良信を従へて出づ。大殿とは眞向ひのところに蹲る。

大殿。おお、良秀、まゐつたか。今宵はその方の望み通り、車に火をかけて見せて遣はさう。

良秀。忝なう存じます。□□□□□□□□□□

予はその車にこれから火をかけて、目のあたり炎熱地獄を現ぜさせるつもりぢやない、

□□たまま乗せてある。されば車に火  
\*<sup>1</sup>堅く

\* 1  
堅く

〔ここまで四五〕  
〔四七〕 枚目。

□□をかけたら、必定その女めは、肉を焼き  
 □□骨を焦して、四苦八苦のいたましい最期  
 □□を遂げるであらう。その方が<sup>\*2</sup>屏風を仕上  
 □□ぐるには、またとないよい手<sup>\*2</sup>地獄変の  
 □□本ぢや。（聲を励まして）良秀。雪のや  
 □□うに白い肌が、紅蓮の炎に燃え爛れるの  
 □□を、ゆめ見遁してはならぬぞよ。風に煽  
 □□られて乱る黒髪が、火の粉となはず<sup>\*3</sup>舞  
 □□ひ上るさまも、眼を見張つてよ<sup>\*3</sup>ともにう  
 □□見て置け。□□□□□□□□□□□□□□□□  
 良秀。（無言のままうなづく）□□□□□□□□  
 大殿。末代までも<sup>\*1</sup>ない観物ぢや。予もここで  
 □□見物致すぞ。（縁先に向つて）惟清。貞光。  
 □□簾を揚げて良秀に、中の女を見せて  
 □□遣はせ。□□□□□□□□□□□□□□  
 □□惟清はそのまま動かずにあるので、貞光  
 □□一人立ち上がりつて、車に近付き、仕丁に

\*1 またと奉り

〔ここまで四六〔四八〕枚目。〕  
 〔右欄外に書き込み。〕

\*3 良信。おお、

□□吩咐けて簾を上げさせる。□□□□□□□  
 貞光。良秀どの。よう見られい。□□□□□□  
 □□仕丁の持つ松明の光は、ひとしきり赤く  
 □□搖ぎながら、車の中を鮮やかに照らし出  
 □□す。□□□□□□□□□□□□□□□□□□  
 □□繡ぬいのある櫻の唐衣、すべらかしの黒髪、  
 □□うちかたむいた黄金の釦子、身装こそ違  
 □□へ、鎖に縛められた車の中の女房は、ま  
 □□さしく良秀の娘の夕月である。□□□□

\*2 悲痛な

良秀。（思はず\*\*2聲を立てて叫ぶ）おお、娘。□

□□良秀は飛び立つやうに立ち上がりつて、□思  
 □□はず車の方へ走り寄らうとする。□□□

〔\*3、一八・一九行目の行間に挿入指示。〕

〔\*3への挿入部分、一四行目上欄外に書き込み。〕

貞光。（それを遮つて）これ、何をするのぢや。

□□大殿の御前で無禮であらうぞ。□□□□

良秀。ぢやと申して見す見す娘を。□□□□

貞光。ええ、何を騒ぐ。扣へて居れ。□□□□

〔ここまで四七【四九】枚目。〕

<sup>\*2</sup> 良秀。  
良信介抱する

良秀。良秀は貞光の強力に押し隔てられて、

<sup>1</sup> そこへたへたと

〔行間書き込み。末尾三文字下欄外にかかる。〕  
〔<sup>2</sup> への挿入部分、三・四行目上欄外に書き込み。〕

<sup>\*2</sup> まるで失神したもののやうに、荒の座  
は床やて、崩折れてしまふ。□□□□□

大殿。(冥官のやうな凄じい聲音で) 火をかけい。

□□仕丁等はその聲<sup>\*3</sup>を聴くと、同音に「おう」と  
□□云ふ聲を闇に<sup>\*3</sup>言葉響かせながら、各手に

□□持つた松明を車に向つて投げ付ける。車

□□は忽ち炎々と燃え上がる。□□□□□

□□庇についた紫の流蘇が、煽られたやうに

□□さつと靡くと、白い煙が渦を卷いて、簾、

□□袖、棟の金物などを包む。火の粉が雨の

□□やうに舞ひ上がつて、焰はめらめらと袖

□□格<sup>\*4</sup>に搦みながら、夜の空高く立ち騰つて

□□ゆ<sup>\*4</sup>子く。□□□□□□□□□□□□□□□□

□□良秀は再び立ち上がつたが、今度は唯食  
ひ入るやうな眼差で、じつと車の方を見

〔行間、<sup>\*2</sup>挿入指示。〕

□□詰めてゐるばかり、身動きもしない。大  
□□きく見開いた目、引き歪めた脣、震へて

〔<sup>5</sup>絶えず〕

□□ゐる頬の肉、その顔には心の中を往来す  
□□る、驚き、恐れ、悲しみなどが、見るも  
□□いたましい位まざまざと現はれてゐる。  
大臣。（思はず呻きながら讐言のやうに）良秀。

□□見遁してはならぬぞよ。目を見張つてよ  
□□う見て置け。□□□□□□□□□□□□□□  
□□しかし良秀はさう云ふ言葉は耳にも入ら

〔<sup>1</sup>で〕

□□ぬ様子<sup>1</sup>、焰の中から浮き上つて見える、  
□□髪を口に嚙みながら、縛の鎖も切れば  
□□かり、身悶えをしてゐる娘の姿を、じつ  
□□と一心に見詰めてゐる。□□□□□□□□  
□□さうするとの時、何處からともなく良  
□□秀と呼ばれてゐた猿が、黒い鞠のやうに  
□□現はれたかと思ふと、火の燃えさかつて

〔左欄外書き込み。ここまで四八〔五〇〕枚目。〕

〔行間書き込み。〕

□□るる車の中へ十文字<sup>\*2</sup>に飛び込む。□□□  
大臣。おお、猿が<sup>\*2</sup>まつしぶら來をつたな。□□  
惟清。おお、猿ぢや、猿ぢや、可哀さうに。

□□無言でゐたみんなの間に、「猿だ、猿だ」と

□□云ふ叫きがざわざわと起る。□□□□□

□□猿は焼け落ちる袖格子の火の粉を浴びな

□□がら、のけ反つた娘の肩に抱き付き、帛

□□を裂くやうな鋭い啼き聲を、二聲三聲悲

□□しさうに立てる。□□□□□□□□□□□

□□その瞬間、娘はと舞ひ上がつた黒煙の

□□中に娘の姿も猿の姿も押し隠されて、庭

□□には唯猛火に包まれた一輛の車が、凄ま

〔\*1への挿入部分、七行自行末一マスク一〇行目の下欄外にかけて書き込み。〕

□□じい音を立てて燃えてゐるばかり。  
□□しかもこの時には良秀の顔からは、<sup>\*1</sup>あや

□□まの悲痛な表情は<sup>すす</sup>つかり消え、恍惚と

□□した法悦の輝きが、満面に明るく現はれ

□□てゐる。□□□□□□□□□□□□□□□

大臣。大臣はそれに引きかへ、顔の色も青ざめ

□□て、膝をしつかり摑みながら、渴いたや

□□うに喘ぎつづけてゐる。\*2燃え□□

大殿。（堪へられないやうに）焼け\*2い、焼け\*3い、

□□地獄の業火さながらの焰ぢや。牛頭馬頭

□□の姿さへまさまでと見ゆる心地が致すぞ。

□□良秀。そなたの望み通り車も焼いた。い

□□や、いや、車ばかりではない、そなたの望

□□み通り女房も焼いた。（もの狂ほしげに笑

□□ふ）はゞくゞく、燃えるわ、燃えるわ。さ

□□ながら車は火の柱ぢや。良秀。見遁す

□□な。よう見て置け。\*1はまるで\*2れず□□

□□良秀はその言葉など\*1耳に入ゆぬ様子で\*2、

□□むしろ嚴●かにさへ見えるやうな恍惚と

□□した顔付で、じつと火炎の色の美しさに

□□見惚れてゐる。□□□□□□□□□□□□

□□横川の僧都庭先の闇の中から現はれる。

□□僧都。（溜\*3息をして）ああ、もう何もかも終つ

□□た後\*3歎だつたのか。□□□□□□□□□□

〔ここまで五〇【五二】枚目。〕

□□僧都は猶燃えてゐる車の方に向つて合  
□□掌しながら、低い聲で経を誦はじ  
□□める。□□□□□□□□□□□□□□□□  
□□良秀が夢見るやうな眼差で、ふらふらと  
□□車の方へ近付かうとするのを、良信が無  
□□言のまま引き留める。良秀は恍惚として  
□□指先で画を描くやうな形をする。□□□  
□□数知れぬ怪鳥の<sup>\*4</sup>聲がしたかと思ふと直ぐ  
□□に止む。□□□□  
□□<sup>\*4</sup>啼き□□□□□□□□□□□□□□□□  
□□後には唯横川の僧都の誦経の聲。□□  
□□その二□□□□□□□□□□□□□□□□  
□□堀川の邸。□□□□□□□□□□□□□□□□  
□□對屋の一部。勾欄、妻戸など。夕方。  
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□  
□□<sup>\*1</sup>に<sup>\*2</sup>置疊をした<sup>\*3</sup>つ□□□□□□  
□□几帳のあなた<sup>\*1</sup>木殿の<sup>\*2</sup>褥があも<sup>\*3</sup>て、そこに  
□□大殿が病臥してゐるのだけれども、こち  
□□らからは見えず。□□  
□□<sup>\*5</sup>修法祈祷□□□□□□

〔こまで五一【五三】枚目。〕

〔一・二行目の行間に位置。二行取り。〕

〔三行目。〕

\* 4 奥の方に

\* 4 護摩壇があつて加持 \* 5 の僧達がその前に座

□□つてゐる姿が見える。

□□狹霧、螢火、眞菰の三人の女房。

\* 6 狹霧。殿様のお悩みには、如何なる加持祈祷

\*<sup>6</sup> 大も、あんまり●験が見えないやうで

すね。

螢火。丁度もうこれで一月あまりになります

□□けれども、いつも夕方になりますとあの

□□ やうに、咽喉の渴いた獸のやうな、呻き聲

□□を立ててお苦しみになります。

眞菰。それと云ふのも夕月どのを、生きなが

□□らの焦熱地獄、無残に焼き殺した祟りだ

などと、誰の口から洩れたものか、世間

では尊をしてゐるさうでござります。

ほんとにさう云ふ尊と云ふものは、案

□□外早く傳はるもの、わたくしの聽きまし

□□たところでは、それと云ふのも叶はぬ恋

□□力とこれでは  
それと云ふのを叫ばぬ恐

行間書き込み。

〔二〕まで五一〔五四〕枚目。

□□の恨み<sup>いみ</sup>などと云ふ取沙汰を、まことしや  
かに致<sup>いた</sup><sub>1</sub>だして居りました。□□□□□  
螢火。しかし大殿様が蟲斎罪のない夕月どの  
□□を、ああして無残にお焼き殺しになるの  
□□のには、何か深い仔細があるのだと、わ  
たくしには考へられますけれど。□□□  
眞菰。それがはつきり分らぬだけに、世上で  
□□致す噂もとりどり、大殿様を かば ふものは、  
□□車を焼き人を殺してまでも、屏風の画を  
□□描かうとする繪師根性の曲<sup>まがい</sup>なのを、□懲らす  
□□おつもりだつたのに違ひないと申して居  
□□りますが、これもわたくしには信じられ  
□□ません。□□□□□□□□□□□□□□□□□□  
□□して居りました。□□□□□□□□□□□□□□  
狹霧。しかしどなただか大殿様が、●●<sup>2</sup>と同  
□□じやうなことを、お口づから云つておる  
□□でになつたのを、伺つたことがあると申  
□□して居りました。□□□□□□□□□□□□□□

## 〔行間書き込み。〕

〔網掛け部分の濁点、稿者が補った。〕〔ここまで五三〔五五〕枚目。〕

「かばふ」の箇所、一マス空白、ルビのみ。」

螢火。それならば大殿様の●思し召しは、最  
 □□初から夕月どのを焼き殺すおつもりでは  
 □□なかつたのでございませうか。□□□□  
 真菰。しかし大きな聲では申されませ●が、  
 □□大殿様が夕月どのに心を寄せておゐでに  
 □□なつたことは、\*<sup>1</sup>わたくしがよう知つて居  
 □□ります。現在わ\*<sup>1</sup>誰よりもたくしは或る夜  
 □□更けに、\*<sup>2</sup>廊下の曲り角、\*<sup>3</sup>池水の白いのが  
 □□見えと□□\*<sup>2</sup>丁度ころで、\*<sup>3</sup>夜目にも夕月どの  
 □□に無體なことを挑んでおゐでになる大殿  
 □□様の姿を、不図垣間見たことがございま  
 □□す。□□□□□□□□□□□□□□□□□□  
 狹霧。あの猿も可哀さうに、一緒に焼き殺さ  
 □□れたさうでございますね。□□□□□□  
 螢火。何處を如何してあの洛外の雪消の御町  
 □□まで忍んで往つたか、獸ながらもいぢら  
 □□しいではございませんか。□□□□□□  
\*<sup>1</sup>話に聴いただけで \*<sup>2</sup>い。

〔右欄外に書き込み。〕

〔(二)ここまで五四【五六】枚目。〕

〔網掛け部分、「見えるところで」の「る」の脱落か。〕

眞菰。話は聴いただけヤも怖ろシキシのや

□□うなことになつたのも、みんなあの地獄

□□變の屏風から。

\*3 が

□□若殿\*3心配さうな顔付にて出づ。

□□□□

若殿。父上のおん悩みはどんな工合ぢや。

□

狹霧、はい、やはり夕方になりますと、悶え

□

□□苦しんでお悩みになります。

□□□□

若殿。さうか。日も夜も護摩の火を焚いて、

□□修法すはふしつづける加持祈祷も、いまだに驗

□

□□がないと見えるな。

□□□□□□□□□□□□

螢火。もう一月あまりになりますのに、おん

□□悩みの御様子は、少しもお変りになりま

□

□□せん。

□□□□□□□□□□□□

若殿。世上でいろいろ取沙汰を致して居ると

□

□□云ふことだが、早く御平癒にならないと、

□

□□噂は\*5ひろまつてゆくばかりだらう。困つ

□□□□

\*4 怪しい  
\*5 日毎夜毎に、たことになつ

〔行間書き込み。〕

□□たものだ。□□□□□□□□□□□□□□  
□□近侍の者出づ。□□□□□□□□□□□□□□  
近侍。横川の僧都様がおゐでになりました。

\*<sup>1</sup> 女房達は几帳のあなたに入る。

大殿。丁度よい。直ぐにこちらにお通し申せ。

□□近侍去る。\*<sup>1</sup>間もなく横川の僧都出づ。□  
若殿。ああ、阿闍梨様にはようこそお訪ね下

□□さいました。さあ、どうぞこちらへ。□  
僧都。御免下され。若殿にもさぞかし御心配

□□なことでござ回う。□□□□□□□□□□  
若殿。はい、何分うるさいは世上の取沙汰、  
□□それゆえ一層心がかりに存ぜられます。

僧都。不思議やこの度の大殿のおん悩みには、  
□□如何なる加持祈祷もその駿なく、法力も  
□□今を限りかと見え申す。僧尼検校の役を  
□□勤むるわが身に取つて、これ程あさま  
□□しく無念の思ひを致したことは、いまだ  
□□嘗てござりませぬ。□□□□□□□□□□

〔右欄外下方に二行に亘り書き込み。〕  
〔ここまで五五【五七】枚目。〕

<sup>\*2</sup>  
に極つて  
居ります

若殿。何か生靈とか死靈とか申すやうな、怖  
ろしいものの怪が憑いてゐるのでござい  
ますか。□□□□□□□□□□□□□□□□  
僧都。さあ、それにはいささか思ひ當ること  
もございますが、わたくしの口からは  
つきりそれとは申し上げられませぬ。□  
若殿。それではやはり世間で噂を致す通り。  
僧都。いや、よしなき世上の噂などは、心に  
お懸けにならぬがようございます。なあ  
に如何なる<sup>\*1</sup>魔障●なりとも、やがては不  
断の法<sup>\*1</sup>に執念き□力のために、調伏せら  
るる<sup>\*2</sup>おませり。今日よりは一層修  
法を厳かに、加持祈祷を續けさせませう。  
若殿。今は唯法力のみが頼みでございます。

どうかよろしくお願ひ致します。□□

逝<sup>(貞光)</sup>出づ。□□□□□□□□□□□□  
遂<sup>\*5</sup>や拂ひませうか。〔下欄外にかけて書き込み、削除。〕

<sup>[3]</sup>貞光

<sup>[4]</sup>ああ、若殿。

逝<sup>\*3</sup>。良秀どのが見えられました。

<sup>[5]</sup>かねてお

〔行間書き込み。〕

〔\*2への挿入部分、五行目、上欄外へ行頭二マス分にかけて書き込み。〕

□□吩咐の地獄変の屏風が、やつと出来致し  
□□たゆゑ、持參致したといふ御印上にござ  
□□ります。<sup>6</sup>良秀がまゐつたとな。<sup>6</sup>

若殿。なに、地獄変の屏風が出来致した。<sup>6</sup>

逝侍<sup>7</sup>。はい、<sup>8</sup>かねてお吩咐の地獄変の屏風が、

貞光<sup>7</sup>。それにかう云ふ場合も罔はず、<sup>8</sup>やつと

出来致したゆゑ、持參致したと申して居

上せ席ります。<sup>6</sup>

若殿。なに、地<sup>9</sup>変の屏風出来、持參致したと

<sup>9</sup>獄

□□申して居るのか。  
貞光。はい。如何致しませう。持ち販るやう  
□□に申しませうか。  
若殿。(思案してゐる)  
貞光。何と云つても大殿の●の度のお悩みの  
□□因はと云●へば、  
□□さいます。それが出来致したからと云つ  
□□て、かう云ふお取込の最中に、持込んで

〔左欄外に書き込み。〕〔いこまで五七【五九】枚目。〕

□□来る大だわけ、追つ拂つてしまひませう。  
 □□貞光立ち上らうとするのを僧都留める。  
 ●僧都。いや、待たれい。<sup>1</sup> ●ささか思ふところ  
 □□も<sup>2</sup>あれば、地獄□<sup>1</sup>〔若殿に〕変の屏風持参  
 □□□<sup>2</sup>ございますのまま、良秀をここへお通し  
 □□になつたら如何でございます。□□□□  
 若殿。阿闍梨様がさう云はれるならば、何の  
 □□異存もござりませぬ。(貞光に向ひて) 今横  
 □□川の僧都様の云はるる通りだから、奥は  
 □□ずここへ通したがいい。□□□□□□  
 貞光。それでもあの地獄變の屏風などを。  
 若殿。まあ、よいからお通し<sup>3</sup>がよい。□□  
 [左欄外に書き込み。]〔ここまで五八〔六〇〕枚目。〕

<sup>1</sup>これまで見られな  
 (右欄外下方から一行目行末二マス分にかけて書き込み。)  
 かつたやうな

□□貞光不承不承に去る。□□□□□  
 □□間もなく貞光に案内されて、□良秀は<sup>1</sup>かず  
 □□<sup>2</sup>も明る・輝やか<sup>2</sup>顔付をして出て来る。  
 □□その後から<sup>3</sup>秀<sup>2</sup>いた起とが、出来上つた

□□地獄変の<sup>\*3</sup>良信と屏風を運びながら徒ぶ。  
貞光。<sup>\*4</sup>召し連れました。□□□□□□□□□□

□□□□  
\*4 良秀どのを □東光去る。 <sup>\*6</sup>その後□□

良秀。  
(躊<sup>\*5</sup>まつて) 大殿様のお悩みは<sup>\*6</sup>如何でござ  
□□いま<sup>\*5</sup>畏<sup>6</sup>せうや。良秀も案じては居りま  
□□したが、このおん悩みを平癒させるもの  
□□は、ひとへに藝の力のみと信じまして、

□□ひたすら画にのみ精進致し、今日まで一

□□心不乱、魂籠めて屏風<sup>\*7</sup>のみ向つてゐたの

□□でござります。お吩咐<sup>\*7</sup>にけの地獄変の

□□屏風、かく出来致しました上は、もはや

□□御平癒は瞬くうちにござります。□□□

貞光。何を馬鹿な。□□□□□□□□□□

良信。なに。何が馬鹿なのだ。□□□□□□

貞光。屏風が出来たから御病氣平癒などとは  
□□馬鹿々々しいにも程があるわ。□□□□

番起<sup>\*1</sup>良信

典儀<sup>\*1</sup>。おのれそのやうなことを云つて、お師

〔ここまで五九【六一】枚目。〕  
〔右欄外に二行に亘り書き込み。〕

●貞光。けちを附けるのではない。ほんとのこ  
□□匠様の描かれた屏風にけちを附ける気か。

□□まやまらぬか。（良秀に向つて）良秀。そ

\* 4

良秀。（和<sup>正氣で</sup>やかに笑つて）勿論正氣で申  
□□ちは<sup>3</sup>今申<sup>レ</sup>せ<sup>4</sup>ことを申して居るのか。□

□□して居ります。良秀如何に画道に魂を打ち込みましても、いまだ乱心は致しま

□□せぬ。(護摩壇の方を見て) 若殿。もはや加  
□□持祈祷をお止め。せになたら如何でご

若殿。なに、加持祈祷をやめさせいと申すか。  
僧都。(奮然として) ●●。これは聴き棄てに

□□ならぬ言葉ぢや。良秀。加持祈祷を止め

□□させいと申すのには何が思ふ仔細をあるらう。先づそれから聽かうぢやないが(\*4)

〔行間書き込み。〕



□□ませんか。□□□□□□□□□□□□□□□  
 僧都。〔無譯〕それと云ふのが大殿様のお悩み  
 □□が、あまりに深い罪障から来てゐるゆゑ  
 □□ぢや。それもその方が怖ろしい<sup>\*5</sup>望み致し  
 □□たからのことぢやぞ。□□<sup>\*5</sup>ことを、殿にお  
 良秀。(冷やかに) 姑●仰は罪障が深ければ深いほ  
 □□ど、法力の驗はいよいよあらたかに現は  
 □□れねばなりませぬ。そもそも護摩と申せ  
 □□まするは、智慧の火を以て煩惱の薪を焼  
 □□き、真理の焰を以て魔害を燃やし盡くす  
 □□の法でござります。智慧に曇りがあり、  
 □□眞理●偽りがありますれば、●何して煩  
 □□惱を燃●魔害を除くことが出来ませうや。  
 僧都。そ<sup>1</sup>断ち●れでは今廣言のやうに、そな  
 □□たは藝の力に依つて、大殿様のお悩みを  
 □□お救ひ申すことが出来ると信じてゐるの  
 □□か。□□□□□□□□□□□□□□□□□□□  
 良秀。はい、恐れながら信じて居ります。□

〔ここまで六一【六三】枚目。〕

□□この時几帳の奥から大殿の聲が聽こえる。

大殿の聲。良秀がまんつたらしいが、<sup>\*2</sup>地獄変

□□の屏風は、もはや出来致した□

\*2 かねて吩咐け  
置いたも

□□であらうか。若し持參致した□

も

□□のならば、早う見たい。罔はぬからこち

□□らに運び入れい。□□□□□□□□□□□□

若殿。●若殿も僧都もその聲を聽いてかわや。

\*3 驚く。

若殿。おお、あれはまさしく父上のお聲ぢや。

□□さきほどまでおん悩みの褥の上に、横は

□□つて、おゐでになつたとも思はれぬほど、

□□力強いあの聲音は。□□□□□□□□□□□□

\*1 れ

〔左欄外に書き込み。〕〔（）まで六二【六四】枚目。〕

僧都。（呴くやうに切れ切<sup>\*1</sup>に）。法力の限りを盡く

□□しても、御平癒にならなかつた●大殿様

□□が。（問。）今のあの聲は悩みある身とも

□□思はれぬ。（護摩壇の方を見て）護摩の火

□□はあるのやうにもの凄じく燃えてゐるのに。

〔\*2 への挿入部分、一六行目行末四マス分 + 一文字下欄外、一七行目行末一七〇一九マス目を使用し、書き込み。〕

□□（間。）摺り合はす珠數の音。高らかに□  
 □□讀む経の聲。□□□□□□□□□□□□  
 若殿。（近侍の者に）それ、その屏風を父上の  
 □□お褥近く運び入れい。□□□□□□□□  
 □□近侍の人達は屏風を几帳の蔭に運び込む。  
 □□間もなく大殿の聲が聴こえて来る。□□  
 大殿の聲。おお、思ふにまさつた見事なる出  
 □□來榮ぢや。●ここに\*<sup>2</sup>描いてあるのは十王を始め  
 □□眷属達ぢやな。あと\*<sup>2</sup>描いてあるのは一面の\*<sup>3</sup>大  
 □□紅蓮、唐めいた冥官達の衣裳が、□□小紅蓮  
 □□点●と黄や藍を綴つてゐる外は、□□どこを  
 □□見ても唯一面、烈々とした火焰の色ぢや。  
 □□（間。）うん、素晴らしい絵ぢや、見事な出  
 □□來ぢや。卍のやうに墨を飛ばした黒煙、  
 □□金粉を飛ばしたやうな煽られた火の粉、  
 □□業火に焼かれて苦しんでゐる罪人も、さ  
 □□ながら阿鼻叫喚の聲を立てるかとばかり  
 □□思はるるぞ。多くの罪人を仔細に見れば、

〔ここまで六三【六五】枚目。〕

□□上は月卿雲客から、下は乞食非人に至る  
□□まで、よくも寫しよくも描いた。牛頭馬  
□□頭の獄卒に虐まれて、大風に吹き散らさ  
□□るる落葉のやうに、\*<sup>1</sup>八方へ遁げ惑つてゐ  
□□る罪人達。(問) お\*<sup>1</sup>四方お、多くの亡者  
□□が壘々と五体を貫かれてゐる刀樹の上、  
□□中空から落ちてゐる一輛の車。(問) 閑  
□□え苦しんでもゐる女房の姿は、さながらこ  
□□の繪の怖ろしさを、一心に集めたやうに  
□□思はるるぞ。□□□□□□□□□□□□□□

\*<sup>2</sup>几帳

□□大殿は狂喜して●●\*<sup>2</sup>の蔭より現はれる。

大殿、良秀。見事ぢや、□見事ぢや、これでこ

□□そあつぱれ本朝第一の繪師ぢや。□□□

\*<sup>1</sup>僧都画を見て感心する。

〔行間書き込み。〕

〔二〕まで六四【六六】枚目。」

〔右欄外に書き込み。一行目の前に挿入指示。〕

良秀。(冷やかに落ち付いたま) お褒めにあづか  
□□りまして、身にあまる仕合せに存じます

\*<sup>1</sup>

□□る。さりながら、●殿。わたくしはこの地  
 □□獄変の屏風を最後と致しまして、再び繪  
 □□筆は取らぬ覚悟でござります。いや、絵  
 □□筆を取らぬばかりでなく、おそらくは二  
 □□度と再び、殿にお目通り致しますことも  
 □□ござりますまい。(沈痛に) やまよりはわざ  
 □□メレは材も魂も<sup>2</sup>この地獄変の屏風<sup>3</sup>に<sup>4</sup>打  
 □□も込みました。<sup>2</sup>打ち込んだつまりは<sup>3</sup>は、<sup>4</sup>  
 □□わたくしがこの世に残す形見なのでござります。  
 □□それではこれでお暇を致します。□□□

\*<sup>5</sup>思●●ひ直して

〔行間書き込み。〕

太殿。\*<sup>4</sup>太殿は引き留めやうとしたが止めや。\*<sup>5</sup>じつ  
 □□□\*<sup>4</sup>良秀は静かに●禮して立ち上がる。と見送  
 □□る。僧都はその言葉の意味を察して、立  
 □□ち去つてゆく後ろ姿に向つて合掌する。  
 □□護摩の火はあかあかもの凄じく燃え、僧  
 □□達の讀経の聲は、なほ肅やかにつづいて  
 □□ゐる。□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□



〔ノノ〕まで六五【六七】枚目。〕

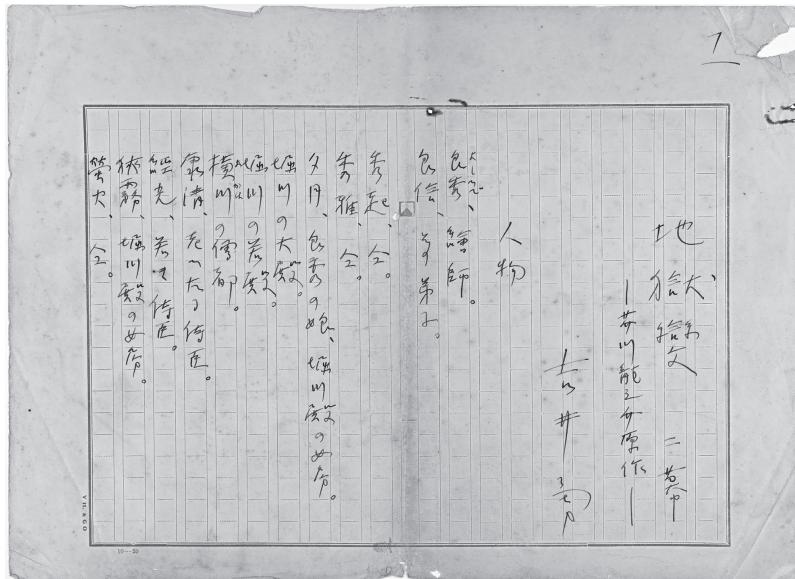
注

- (1) 「京都女子大学通信」一一四号(110-15・10・1)「図書館資料紹介 絵と歌が描き出す」の世の地獄『地獄変絵巻』」(110-10・11・16)「地獄変絵巻」(三九頁) 参照。

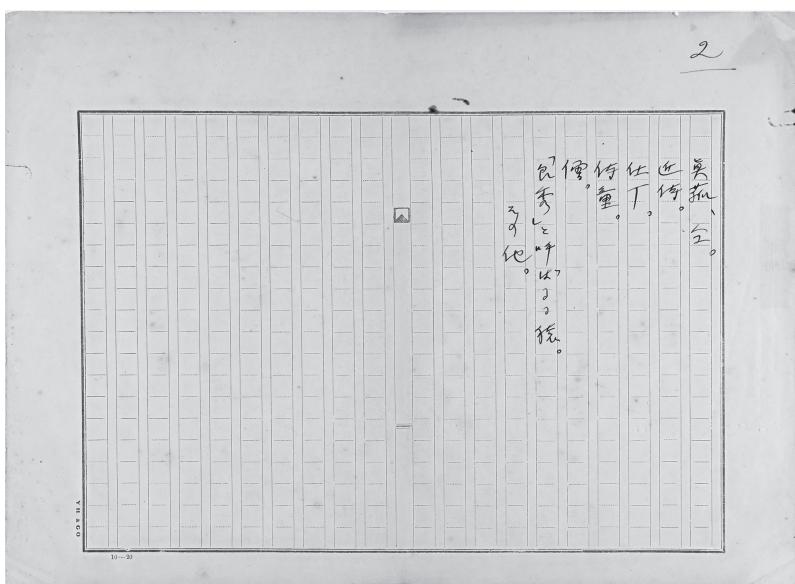
(2) 「地獄変絵巻」の成立は、巻末に「地獄変絵巻を見てつくれるうた八首 洛中忘吾亭にて 相聞歌隠 勇」とあるところから、勇が京都市内に居住した期間(昭和十三年十月～左京区北白川東葛町～同十九年十月～二十年二月岡崎円勝寺町、二十三年八月～上京区油小路元誓願寺町～二十六年八月～左京区浄土寺石橋町)のうちのいずれかである(『定本吉井勇全集』第九巻〔昭和五四・一一番町書房〕所収年譜参照)。吉村忠夫は、本絵巻と同趣の作品を外にも残しており、福岡市美術館所蔵の「地獄変」の制作年が昭和二十五(一九五〇)年(同美術館HP所載、「コレクション」[https://www.fukuoka-art-museum.jp/archives/modern\\_arts/3449?title=&name=%E5%90%89%E6%9D%91&year=1950&genre=&collection=](https://www.fukuoka-art-museum.jp/archives/modern_arts/3449?title=&name=%E5%90%89%E6%9D%91&year=1950&genre=&collection=))、吉村忠夫画の「名作絵物語 地獄変」は雑誌『苦楽』第四巻第八号所載(昭和二十四年八月発行)、吉村の没年なども考慮すると、これらの諸作と同時期のものと推定される)とから、吉井の油小路元誓願寺町時代の成立と目される。

○京都府立京都学・歴彩館には貴重な資料の閲覧・翻刻並びに画像掲載を許可いただきました。また、同館資料課の皆様にたいへん御世話になりました。厚く御礼申し上げます。

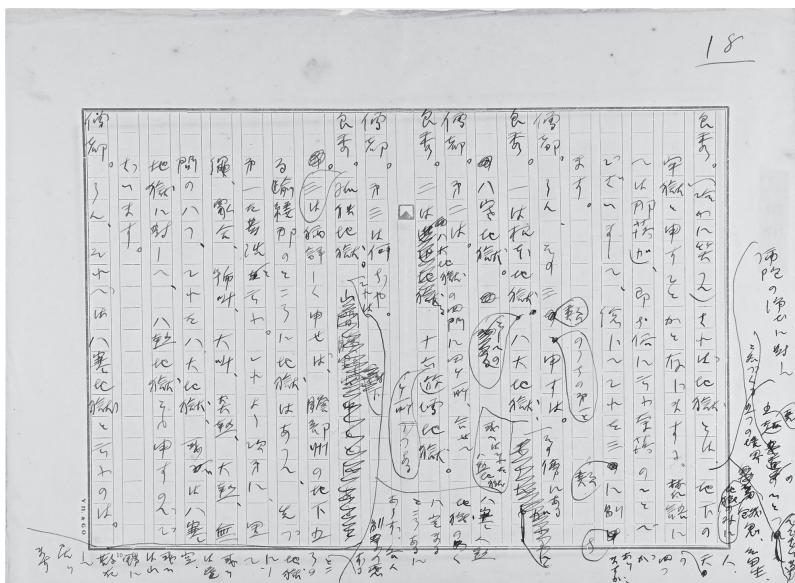
○原稿ノンブル18(本誌89頁)の下欄外の書き込み部分の内、二箇所の漢字の判読にあたり、中前正志先生、坂本信道先生、中西俊英先生にご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。



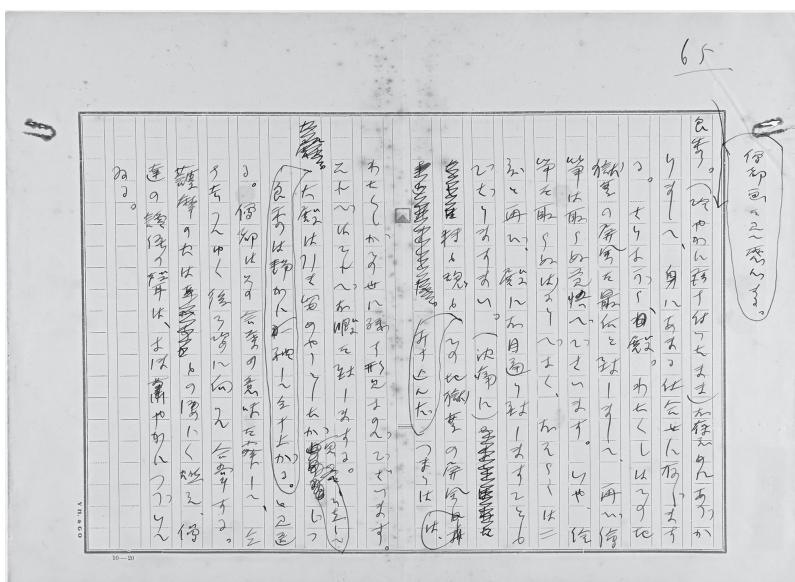
### 画像1 (ノンブル1) 表題・登場人物紹介



## 画像2（ノンブル2）登場人物紹介続き



画像3 (ノンブル18) 良秀と横川の僧都の地獄問答



画像4 (ノンブル65) 最終場面